JAGDA

Japan Graphic Designers Association Report

180

JAGDAのお引越し

2007年2月、JAGDAは原宿から六本木へその拠点を移しました。
デザインをキーワードとする新しい街「東京ミッドタウン」への、
日本全国のグラフィックデザイナー2500名を擁する組織の〝お引越し〟。
それは、JAGDA自身だけではなく、日本のデザインが、社会が変わる兆しかもしれません。

いま最も注目される
デザインの文化エリア・六本木に、
JAGDAは拠点を築くこととなりました。
グラフィックデザイナーが、
社会に貢献する仕事を行ってきたことを
象徴するような出来事です。
この新しいステージで、
激動するヴィジュアルコミュニケーション文化を
世界へ発信していきたい。
ハードルは高いですが、
会員のパワーを結集し、
各企業や諸機関のみなさまと共に、
この使命を果したいと思います。
前途を祝して乾杯!

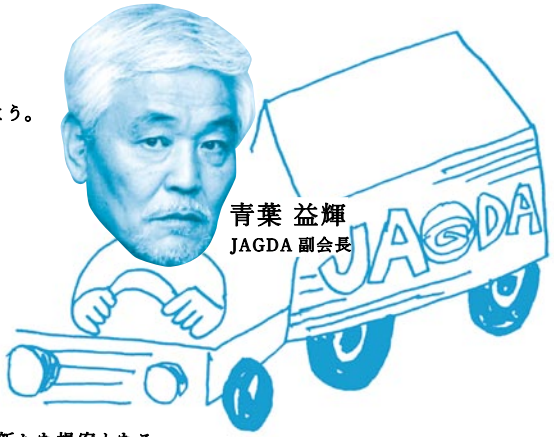
福田繁雄
JAGDA 会長

JAGDA、街に出る。

依頼されてデザインする時代から、
初めにデザインありきの時代にしよう。

今日から、今から、
日常を見直そう。日本を見直そう。

全国の会員一人ひとりが
グラフィックデザインを
もっと広く、深く創造し、発表する。
六本木のJAGDAは、
そんなことのできる場になります。
今回の移転は新たなチャンス。
その第一歩として、この12月、全く新たな提案となる、
デザインの展覧会を企画中です。



青葉 益輝
JAGDA 副会長

新しい事務局には、
事務の拠点としてだけではなく、
JAGDAのプレゼンテーションルームとしての
機能を期待したい。
飛躍的に充実した環境には、
訪れる会員も増えるだろうし、
一般の方や世界からの来訪者も受け入れやすくなった。
社会に開かれた場、世界との交流の場としての
条件が整ったと言え、積極的に活用していきたい。
会員の積極的な参加による新しいムーブメントを、
社会に見えるかたちとして
発信できることを願っている。

上條喬久
JAGDA 副会長

8m×40mの空間を擁する
「東京ミッドタウン・デザインハブ」。
その一員となったJAGDAは、
他のデザイン諸機関と連携しながら、
全国組織ならではの視点による
魅力的な企画を展開していきます。
また、21_21 DESIGN SIGHT、サントリー美術館、
国立新美術館、森美術館、AXISといった
近隣のデザイン・アート施設ともつながり、
国際的なデザイン交流の中で
機能する場にしていきたいと思います。

勝井三雄
JAGDA総務担当理事

社団法人日本グラフィックデザイナー協会

日本で唯一のグラフィックデザイナーの全国組織として1978年に設立。略称「JAGDA(ジャグダ)」。国内外に約2500名の会員を擁する、アジア最大のデザイン団体。年鑑やデザイン教科書などの出版、展覧会や学生向けイベントの開催、デザインの権利保護や制作料金に関する取り組み、デザインによる地域振興や行政からの委託事業、国際交流など、多岐にわたる活動を全国的に展開している。www.jagda.org

Illustration:Mariko Abe

Cover
02 JAGDAのお引越し
04 Contents

06 特集　六本木×デザイン

08 Brand-new Art Spots in Tokyo Midtown and Roppongi

21_21 DESIGN SIGHT　佐藤卓×高井薫
サントリー美術館　葛西薫＋ナガクラトモヒコ×関本明子
国立新美術館　佐藤可士和×菊地敦己

22 六本木、空欄空景

26 鼎談「六本木のクリエイティビティ 過去・現在・未来」

立川直樹（プロデューサー、ディレクター）
島本脩二（編集者）
長友啓典（グラフィックデザイナー）

38 ステカンのある六本木

42 ROPPONGI FREEDOM

46 六本木デザインサーキット

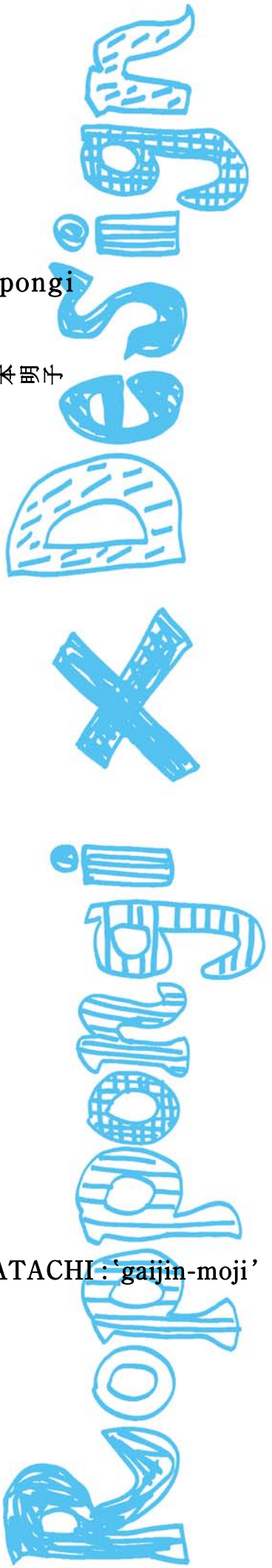
50 ブラリちょっとミッドタウン

54 六本木裏 アン事情

58 入居可能なデザイン事務所向け物件情報

62 ROPPONGI NO KATACHI : 'kami'/ ROPPONGI NO KATACHI : 'gaijin-moji'

66 引越しレポート「ありがとう神宮前、こんにちは六本木」
74 東京ミッドタウン・デザインハブ
76 日本のグラフィックデザイン：JAGDA 1981〜2006
78 デザインフォ：Design Information
80 Acknowledgments



特集

六本木×デザイン

絶えず時代の最先端を
発信し続けてきた街、六本木。
この六本木を拠点として、
JAGDAのデザイナーたちが
クリエイティブワークを
展開します。
ロッポンギ・カケル・デザイン。
いま、大きな相乗効果が
生まれ始めています。

ミッドタウン内外に誕生した、注目のアートスポットを訪ねる。

Brand-new Art Spots in Tokyo Midtown and Roppongi

アート・文化の発信地として変貌を遂げた六本木。その動きを牽引するのは、1月にオープンした国立新美術館、そして3月30日、東京ミッドタウンにて開館した21_21 DESIGN SIGHTとサントリー美術館です。今もっとも注目を集めるこれら3館のシンボル・ロゴタイプは、いずれもJAGDA会員の手によるもの。2006年度JAGDA新人賞の受賞者3名が、それぞれを手がけたメンバーを訪ね、制作にまつわるエピソードを伺いました。

写真／国立新美術館にて　Photo : Keizo Kioku

JAGDA新人賞
優秀な若手デザイナーをクローズアップし、グラフィックデザイン界の活性化を図るため、1983年に創設。毎年、会員作品集『Graphic Design in Japan』出品者の中から特に新鮮かつ作品の質の高いデザイナー（39歳以下）に与えられ、その動向は業界の注目の的となっています。

高井 薫　Kaoru Takai
1967年東京生まれ。多摩美術大学グラフィックデザイン科卒業。サントリー宣伝部を経て、2002年よりサン・アド。ADC賞、朝日広告賞グランプリ、JAGDA新人賞受賞。サントリー、ユナイテッドアローズなどの広告制作、CLASSICS the Small Luxuryの商品デザインなど。

菊地敦己　Atsuki Kikuchi
1974年東京生まれ。プルーマーク主宰。最近では、VIを担当した青森県立美術館や、香川・丸亀の猪熊弦一郎美術館の企画展グラフィック、カフェ「五風十雨」のVIなど、東京以外の仕事も多い。また、プロダクト製品、出版プロデュース、カフェの経営など、多岐にわたる活動を展開。

関本明子　Akiko Sekimoto
1976年東京生まれ。ドラフト勤務。最近の仕事に、JAGDA新人賞やADC賞を受賞したワコールの旗艦ショップ「プールマルシェ」（東京・渋谷）の総合的なアートディレクション、玩具ブランド「リンデン」、アクセサリーブランド「Aco」など。

21_21

「21_21 DESIGN SIGHT」　佐藤 卓 × 高井 薫

その先を見通すデザインを問い続ける、これからのデザインのための実験の場。

優れた視力。その先を行くデザインの視点。

●**高井**　今、深澤直人さんがディレクションされている第1回企画展「チョコレート」の事前ワークショップに、建築やプロダクトやアートなど普段接点のない人たちと一緒に参加させていただいて、その面白さを肌で感じています。佐藤さんも何度か来てくださいましたよね。

●**佐藤**　僕も「水」をテーマとした第2回展を準備しているので、ちょっと見学に行きました。水って当たり前のものだけど、実は不思議なことがいっぱいある。「チョコレート」とはまた少し違う展覧会になりそうです。「21_21」では、三宅一生さん、深澤直人さんと僕の3人がディレクターとして関わっていて、年2回の企画展と、その間のいくつかの試みがあるわけですが、たぶんグラフィックやプロダクト、建築、ファッションといった従来の垣根を取り払って、広い視野でデザインの可能性を探る企画が続いていくと思う。担当するディレクターによっても、そのやり方はずいぶん違ってくると思います。

●**高井**　美術館というわけではないんですよね。だいたいこの読み方は、どういうふうに落ち着いたんですか？

●**佐藤**　今は「トゥーワン・トゥーワン」と言う人が増えていますね。最初は「トゥエンティーワン・トゥエンティーワン」と呼んでいたんですよ。これは英語で完全な視覚（パーフェクト・ヴィジョン）を意味する「トゥエンティー・トゥエンティー（20/20）」から来ていて、そのさらに先を見ていくという意味で「21_21」。だからデザインサイトのサイトも「SITE（場）」じゃなくて「SIGHT（視力）」、デザインの視点、なんです。

●**高井**　私、「ニーイチ・ニーイチ」と言っていました。

●**佐藤**　いいんじゃないですか（笑）。「ニジュウイチ・ニジュウイチ」でもいい。呼び方って、自然と決まってくるじゃないですか。国が変われば言い方も変わっちゃうし、それをガチガチに決めないのも投げかけなんですよね、一つの。

●**高井**　ですよね。そういうところも狙いなのかなと思っていました。

プロダクトとして、ロゴをつくる。

●**高井**　ロゴも住所表示みたいで、面白いですね。

●**佐藤**　プロダクトロゴを作ってみようと。

●**高井**　プロダクトロゴ？

●**佐藤**　という考え方。ロゴというと、普通グラフィックからスタートするじゃないですか。じゃなくてプ

安藤忠雄による建物は地上1階、地下1階で、展示室は地下に2つ。折り曲げられた2枚の鉄板が、屋根として地面に向って傾斜している。オープンに際する特別企画「安藤忠雄 2006年の現場 悪戦苦闘」（3／30〜4／18・会期中無休）では、未使用な状態の建物自体を体験することができる。そして、第1回企画展・深澤直人ディレクション「チョコレート」（4／27〜7／29・火休・5／1開館）では、深澤直人と約30組のクリエイターが、チョコレートを題材に多彩な展示を展開。高井薫をはじめ北川一成、杉山コキ、植原良輔＋渡邊良重（D-BROS）といったJAGDA会員も参加する。佐藤卓ディレクションによる第2回企画展「Water-水」は10月5日より開催。開館時間は各企画により異なる。TEL 03-3475-2121 http://www.2121designsight.jp

Photo : Keizo Kioku

ロダクトが中心にあって、そこからグラフィックやサイン、動画、ウェブサイトへと展開する。実は名前を決めるとき、深澤さんが住所みたいだねとポロっと発言されて、じゃあプレートにして、「21_21」のロゴ自体を目と目の幅にしよう、と。プロダクトのロゴならサイズも規定できるし、持ち運ぶことができるようになる。

●**高井**　ロゴを持ち運ぶという考え方って、面白い。

●**佐藤**　これをデザインの「アイコン」と考えてみたらどうかという提案なんです。たとえば芝生にボーンと投げたら、芝生に対してデザインの視点で考えてみるという意味が込められるということなんですね。それでいろんなところに置いて撮った写真がいっぱいあって、これ、一緒に作業を進めているAXISの宮崎光弘さんが仮に撮った写真をそのまま使おうということで、こういうDMになっちゃった。

●**高井**　DMが届いた時、「21_21」という数字があって、オープンとかデザインとか書いてあるけど、何ができるかもわからないし、謎だらけでした。

●**佐藤**　まさに謎でいい。一体何がここで起きるんだろうという、スイッチをまず入れていただければ。あとは、まだ語らないというDMですね。

●**高井**　なるほど、みごとに引っかかっちゃいました（笑）。ロゴ単体としても斬新ですよね。

●**佐藤**　住所表記って国を超えてあるんですよ。既存のCIのような動かないシステムを作ってしまうと、あまり広がっていかない。けれど、この ロゴなら「場所」を伝えるものだし、デザインの視点というコンセプトにも重なって、放射状にすごくいろいろ広がっていく「交差点」を見つけたという感じで、これしかないと思った。だから1案しか提案しなかったけど、共有が早いメンバーだから即決定（笑）。ちょっとめずらしい経験でしたね。

オープン告知DM
CD：佐藤　卓
AD：宮崎光弘（AXIS design）
D：入澤花絵（AXIS design）

その先に「杭」を打ち続ける、という試み。

●**高井**　「21_21」って何?と思った時に、ディレクターの方々の名前で、みんなが、アッとなりますよね。そもそもどういう背景でこの方々になったんですか。

●**佐藤**　三宅さんは「日本にデザインミュージアムを」という構想をずいぶん前から持っていらしたようで、2年ほど前かな、連絡を頂いて深澤さんと3人で会ったときから、アイデアをキャッチボールしてきました。デザインって全てを同時に勉強できないから、どうしてもグラフィックやプロダクト、建築と、色々な入口から入るじゃないですか。だから世の中に出てもなんとなくカテゴライズされているよね、とか。

●**高井**　最近、私のまわりでもよくその話がでます。でも侵食し合うのもまたどうなのか、とか、わりと議論になる点ですよね。

●**佐藤**　僕はもともと境界はないと思っていて。プロダクトとグラフィックの中間のようなパッケージをやってきたし、ショップのデザインだと照明も音もあって、いろんなことが全部一気につながっちゃう。そもそも僕らの生活には、どこからどこまでというカテゴリーはないんだから、「21_21」では何かテーマを設けて、いろんな角度から、できることは何でもしていってみてはどうだろうか、と。もう何十回とそういう議論をしてきました。

名称も、デザインギャラリーと言えば伝わりやすいけど、逆に既成の概念が立ち上がっちゃうんですよね。「デザインサイト」って何だかわからないけれど、三宅さんは「最初はわからなくていい。後々わかっていくことだから」とおっしゃった。三宅さんは、思いもよらないところに「杭」を打つんですよ、1本、ガーンって。そこを意識して一生懸命考えると、脳が活性化して、まさに新しい神経細胞と神経細胞がつながるような感覚になる。そこでまた、違う何かが生まれてくるじゃないですか。

●**高井**　今まで存在したことのないものだから、今がきっと一番わからない時期で、展覧会が1回、2回と進んでいくと、このプロジェクトの在り方がわかってくる、というより、新しくできてくるんでしょうね。

●**佐藤**　あっ、そういう感覚に近いと思います。わからないから、逆に問いかける。そういう実験の場。「杭」を打つディレクター側もわかっているわけじゃない。だから手探りなんだけど、今度はこっちのあたりに打ってみようかってガーンと打つと、そこからさざ波ができたり、神経細胞がつながろうとして、何かが生まれてくる。それはデザインのジャンルはもう関係なくて、もしくはデザインも関係なくなって、もっとすべての人に関係してくるものだと思う。「21_21」は、これ自体が一つの大きな「杭」みたいなものですよね。

右／ウェブサイトからは自由にロゴをダウンロードできる
Photo：宮崎光弘（AXIS design）

左／館内サイン
CD：佐藤　卓
AD：宮崎光弘（AXIS design）
D：入澤花絵（AXIS design）

佐藤　卓　Taku Satoh

東京芸術大学デザイン科卒業、同大学院修了。（株）電通を経て、1984年佐藤卓デザイン事務所設立。「ニッカ・ピュアモルト」の商品開発、「ロッテ・ミントガムシリーズ」「ロッテ・キシリトールガム」「明治おいしい牛乳」などの商品デザイン、BS朝日や金沢21世紀美術館、首都大学東京などのビジュアル・アイデンティティーデザインを手がけるほか、NHK教育テレビ「にほんごであそぼ」ではアートディレクションのみならず企画メンバーの一員としても活動。また、大量生産品をデザインの視点から探求した展覧会『デザインの解剖』プロジェクトを発表し話題を呼ぶ。著書に『デザインの解剖』シリーズ（美術出版社）、『クジラは潮を吹いていた。』（トランスアート）、共著に『SKELETON』（六耀社）など。

「サントリー美術館」
葛西 薫 ＋ ナガクラトモヒコ × 関本明子

ミュージアムメッセージ、「美を結ぶ。美をひらく。」を形に。

コンセプトから導かれた「み」

●**関本**　サントリー美術館は、赤坂見附から六本木へ移転するんですね。

●**葛西**　ええ、移転を機に館も変わろうという発想があって、マークやロゴタイプを一新しようと。で、以前サントリー本体の新しいCIを担当した僕らに声がかかった。ナガクラ君は美術館そのものの、僕はサントリー全体からの視点でのアートディレクターというような立場になるのかな。もともとの美術館の基本理念が「生活の中の美」で、それをもっと進化させようということでした。

●**関本**　マークが和の感じという印象を受けたのですが、館蔵品は日本のものが多いのでしょうか？

●**ナガクラ**　国宝を含めて、絵画、漆工、あと陶磁、ガラス作品もたくさんあります。日本の生活に関わる美術品が中心ですね。

●**関本**　ひらがなの「み」なのはそのようなところからでしょうか。どうやってこの形に至ったのか、ものすごく興味があります。

●**ナガクラ**　サン・アドはちょうど赤坂見附での最後の展覧会に関わったので、移転への橋渡しということで、新しい美術館はどうあるべきかというコンセプトづくりの企画、プレゼンテーションから始めました。日本人が日本の美に近づくチャンスだということで、「美を結ぶ。美をひらく。」という言葉が生まれたんです。

●**葛西**　実は、マークの開発はその前から始まっていたんですが、やっぱり言葉の柱がないとなかなか決め手がない。コンセプトができてようやくよりどころができたという感じですね。サントリーの「S」や、コーポレートメッセージ「水と生きる」から「水」の流れとか、隈研吾さんの建築の格子から発想したり、いろんな案を考えました。ほとんど2年越しの仕事でしたね。

●**関本**　お2人の役割分担というのは、実際はどんな感じだったのですか。

●**ナガクラ**　完全に競合でデザインすることもあったし、見てもらったりすることもありましたね。

●**葛西**　すごくやりにくかったと思う（笑）。

●**ナガクラ**　ロゴが要る、要らないみたいな話に戻った時期もあったりして、なかなか決まらなかったんですよ。

●**葛西**　そこで、一度深呼吸する感じで考えてみたら、僕とナガクラ君からほとんど同時に平仮名の「み」というアイデアが出てきた。「み」は漢字の「美」から生まれた平仮名、美術館もコンセプトも「美」という字に象徴される、それを日本にしかない平仮名に置き換えて「み」にするという案。最終段階でそれを含めた3、4案を出したところ、社長であり館長である佐治信忠さんの一声で決まりました。だからナガクラ君との共同仕事が結果的にここに行き着けてよかったなと。

ステーショナリー
AD：ナガクラトモヒコ

1961年に丸の内に開館、1975年より赤坂見附で活動。六本木に誕生した隈研吾による建築は「和のモダン」がテーマ。外観は白磁を思わせる縦格子で覆われ、館内は木や紙といった自然の風合いを重視。写真は高さ約10mにおよぶ吹き抜けの空間。窓の格子は「無双格子」という伝統的な意匠にヒントを得て、移動も取り外しも可能な調光装置となっている。開館記念展「日本を祝う」（3／30〜6／3）と開館記念展「水と生きる」（6／16〜8／19）では、国宝・重要文化財を含む館蔵品約3000件の中から選りすぐりの名品約300件と出会うことができる。茶室「玄鳥庵」や「shop×cafe」など、展示室以外の施設も充実。日月祝10時〜18時／水〜土10時〜20時（入館は各閉館30分前まで）TEL.03-3479-8600（フリーダイヤル）http://suntory.jp/SMA/

Photo：Keizo Kioku

文字とマークの境界を探る

●**関本**　その段階で、もうこの形状だったのですか。

●**ナガクラ**　プレゼンでは藤原行成（平安時代の能書家）の字だったんですが、やっぱり館蔵品から選んだ方がいいだろうと、学芸員が「み」の文字を全部ピックアップしてくれたんです。で、室町時代のお伽草子「浄瑠璃絵巻」（作者不詳／16世紀末）から選んだ。

●**葛西**　「浄瑠璃絵巻」は源義経の、なかなかおもしろい話なんですよ。東国に赴くとき、たまたま見かけた浄瑠璃姫という女性と恋に落ちて、いつか再会を約束する。その後、さらに東へ向う途上、義経は重い病にかかり、はからずも彼女に看病されて助かる。そしてその後、浄瑠璃姫は病死する……そんなラブロマンスの中に登場する「み」なんです。そのデザインのフィニッシュにあたって、書として理にかなうように、書家の石川九楊さんに監修をお願いしました。

●**ナガクラ**　僕が複写の文字をデザイン的に修正していくと、石川さんがそこにまた加筆するんです。「このはねはこうだからここは膨らんだほうがいい」と言われて、もう一回。

●**関本**　おもしろいですね。まさに文字のプロの方が参加されたということですね。

●**ナガクラ**　最初の複写が甘くてあいまいだったので、複写し直してもらったんです。そうしたら全然違う字になっちゃって、それに忠実にデザインしたら、石川さんも「これはもうマークというより普通の字だね」と。それを元に戻す作業がまた大変で。

●**葛西**　ファーストインプレッションって結構すごくて、「あ、いいな」と思うと修正できなくなっちゃうところがありますよね。

●**関本**　文字とマークの境をいったりきたり、すごく吟味されたんですね。

●**ナガクラ**　はねとか角度とか結構厳しくやりました。どこまできれいにしていいのか探りながら10パターンくらいで整理していって、みんながだいたい協調するところが、このあたりになった。デザインというより、整理という感覚でしたね。

美術館の財産としてのロゴマーク

●**葛西**　初めての人には「み」に見えるのかな。どうでしたか？

●**関本**　私、説明を読むまでわかりませんでした。

●**葛西**　わからなかったでしょう？その辺もねらいどころで、何だろうなと考えて、でも「み」とわかった瞬間に「み」にしか見えなくなる。日本語ってきれいだねとか、平仮名ってこういう「み」なんだねとか、そういうことも意識されるんじゃないかと。

●**関本**　そうですね。なんだか、これだけで「日本の美をひらく」というコンセプトに繋がって行く感じが、まさに感動です。マークとしてすごく精度が高いというか、完成されていると思いました。

●**葛西**　マークの制作の前にロゴタイプをどうしようかというときに、これまでのサントリー美術館のロゴタイプをリファインするぐらいのものはどうだろう、という話もしました。あの書体はかつてサントリーレッドとかの商品名に使われた独自のもので、味のある不思議な書体なんです。けれど全然受けつけられなかった。なんだかトリスバーを思い出す……とか（笑）。たしかに言われてみれば、ね。

●**ナガクラ**　でも学芸員の人は結構乗り気でしたよね。私もこれは好きなんです、捨てられないんです、って。

●**葛西**　マークも ロゴも収蔵品みたいなものですからね。ここで捨てるのはもったいないという想いはあった。ただ、今回は美術館だけじゃなくて、音楽財団やホールなど、サントリーグループの文化事業としての全体のCIの整合性をつけようということもあって、実現はしなかったけど。

●**関本**　東京ミッドタウンにはまわりに美術館がいっぱいありますが、その中でサントリー美術館をどういう位置付けにしようとディレクションされたのでしょうか？

●**葛西**　六本木に移転することで、サントリー美術館は立地条件から大きな刺激を受けたと思います。おかげで館名が急にポピュラーになったし、「日本の美をひらく」という明確な役割を与えられた感じがする。赤坂見附では来館者も年配の方が多かったけれど、より外国人や若者を意識せざるを得ないことで、これまでだったら分かりにくいとか不親切とか言われそうなこのロゴマークも、思い切って決めることができた。六本木という環境を得たことで、今後は企画の立て方も変わっていくんじゃないかと思います。

●**ナガクラ**　周りの美術館を中心とした「六本木アート・トライアングル」という新しい関係も生まれたし、お互いに刺激し合えるといいんじゃないかなと思います。

●**六本木アート・トライアングル**
国立新美術館、サントリー美術館に森美術館を加えた3館は、六本木のアート関連スポットを紹介する「六本木アート・トライアングル」マップを発行。各館内にて無料で入手できるほか、各ウェブサイトからもダウンロードできる。

出典　左から
欧陽通「道因法師碑」（『書道大事典』伏見冲敬編、角川書店、1974より転載）、
墨流本朗詠集、雲紙本朗詠集、元永本古今集、
高野切古今集第一種（以上、『かな名跡大事典』筒井茂徳編、角川書店、1988より転載）、
浄瑠璃絵巻（サントリー美術館蔵）

右／葛西　薫　Kaoru Kasai
1949年札幌生まれ。（株）サン・アド。サントリーウーロン茶、ユナイテッドアローズなどの長期にわたる広告制作のほか、近作に、SUNTORY新CIのディレクション、TORAYA CAFÉ一連のグラフィックワーク、鹿島建設TORANOMON TOWERSのサイン計画などがある。東京ミッドタウン「ガレリア」にオープンする「とらや東京ミッドタウン店」の、一連のグラフィックも手がけている。同店は展示スペースも併設。「和」をテーマにした企画展を開催していく。

左／ナガクラトモヒコ　Tomohiko Nagakura
1956年東京生まれ。（株）サン・アド。そごう・西武百貨店「夏市・冬市」の広告。NTT DoCoMo「i-MODE」、RECRUIT、NHK「からだであそぼ」などのロゴタイプデザイン。JAGDA年鑑、TCC年鑑、猪本典子著「修道院のレシピ」などのブックデザインなど。

THE NATIONAL ART CENTER, TOKYO

国立新美術館のコンセプトと建築。そのすべてを「新」一文字で表現する。

「国立新美術館」　佐藤可士和 × 菊地敦己

新しいこと、それ自体をコンセプトに。

●**菊地**　僕、この美術館の構想が発表された8年くらい前からウォッチングしていたんですが、可士和さんがVIをやられたことで、突然ふわっと六本木的な表現になっていきましたね。そもそも館からの依頼はいつごろだったんですか。

●**佐藤**　一昨年の秋くらいだったかな。突然「指名コンペなんですが、ご参加頂けますか」と、文化庁の国立新美術館設立準備室というところから電話が来て。

その時点ではもう建物は完成していたし名前も決まっていたので、シンボルマークをデザインしてくださいというシンプルな発注。「NACT」、National Art Center, Tokyo の頭文字をモチーフにするのが条件だったから、「新」を出したのは実はオリエン違反というか（笑）。まあNACT案もつくったし、提案があればほかにもという感じではあったんだけど。

●**菊地**　なるほど。

●**佐藤**　美術館でありながらコレクションを持たない巨大ギャラリーという特殊な状況で、最初はすごく難しいなと思ったし、プレゼンの前に問題点とかいろいろ聞いてみたら、「活動自体がなかなか理解されないし、『国立新美術館』という名前も仮称にとられるようで、正式名称は何ですかって聞かれます」とか（笑）。でも、そういうネガティブなところをパッとポジに転換するような仕事として捉えようと思ったんだよね。ここがやろうとしていることは、今までの美術館からは非常に逸脱した新しいことなんだよなってずっと考えていて。とにかく新しいんですと、この一言で全部が正当化されるようなコミュニケーションの回路をつくろうという提案だったわけ。

●**菊地**　情報からいろいろ想像していたので、最終的に「新」のマークになったのは、なるほどと思ったんです。

●**佐藤**　首都圏で約半世紀ぶりの国立美術館だし、想像もつかないほどいろいろ複雑な事情でできあがっているよね、きっと。でもそういうことを感じさせないようにしたかったし、気持ちよく来てほしいじゃない。国というよりも、六本木という場に受け入れられないと結局美術館のためにもならないかなと思って。

美術館そのものをアイコン化した「新」。

●**佐藤**　国立新美術館は、展示空間としては日本最大級の大きさなのね。工事中の何にもないときに見たら、スパーンと真四角な箱で、けっこう痛快だった。展示室がアートだと思ったもん。黒川紀章さんの建築も、

黒川紀章による建築は国内最大級の展示スペース（14000㎡）を擁し、10を超える展覧会が同時並行で開催できるように機能性を重視。写真は天井高21.6mのエントランスロビーのアトリウム。各階にレストラン「ひらまつ」が運営するカフェやブラッスリー、地下に「CIBONE」プロデュースのミュージアムショップ「スーベニア フロム トーキョー」が併設されている。「自主企画展・共催展」10時〜18時（入館17時半まで）※会期中金曜は20時まで（入館19時半まで）火・年末年始休 TEL.03-5770-8600 http://www.nact.jp

Photo : Keizo Kioku

正面がガラスのカーテンウォール、後方が真四角の展示室と、四角と丸を基調にしていて、パーティションシステムもすごくよくできている。そういう美術館自体のやっていることからアイデアやイメージを引き出して、アイコン化できるといいなと。

●**菊地**　非常に腑に落ちるデザインだなと思って拝見しました。デザイン的な言語を一つに絞って、ほかの要素をなるべく排除していく純粋化の過程がすごいなと。パンフレットを見ても、フォントのサイズやバリエーションが少なくて、デザインの運用の仕組みの簡潔さを感じました。

●**佐藤**　ありがとうございます。美術館はたぶんずっと残っていくし、国が相手だから、普通の民間企業とつき合う感じでもない。だからフォーマットを相当シンプルにして、運用しても崩れないようにしたかったのね。色も、普通は管理するものだけど、赤と黒を基本色にして展開は無限大としておけば、展覧会の内容によってデザイナーが選べるでしょう。一応戻れるところはつくっておきつつも、できるだけ管理しないで、確信犯で何でもありにしましょうと、僕がいなくても運用できるように考えましたね。イメージをキープしていくのにすごく大事でしょう。

●**菊地**　オペレーションのしやすさというのは重要ですよね。基本色の赤と黒も、緋色と消し炭色にされていて、どこか品のよさがあります。

●**佐藤**　最後に黒川さんの建築との融合を考えたときに、真っ黒も真っ赤も建築に乗せるには強すぎるので、少し変更したんですね。

とにかく、まずは美術館として成功してほしい。そういう意味では、ミュージアムグッズってわかりやすいインターフェースかなと。美術館も「ぜひいろいろお願いしたいけれど、クリエイティブディレクター契約という項目がない、一つひとつ業者のように契約をかわすしかない」と言うから、じゃあ、それを積み重ねていきましょうと、ショップを運営する「C－BONE（シボネ）」と三者でプロデュースしていくことになったんだけど、その形態をとれたのはかえってよかったと思う。

●**菊地**　商品のセレクトもよかったし、市場に対して現実的なミュージアムショップだなと思いました。

ミュージアムショップのバッグ
CD＋AD：佐藤可士和　D：石川 耕

アイデンティティのつくり方

●**菊地**　美術館では特に最近、名前が立つ建築家とセットでアートディレクターが選ばれることが多くて、一種ブランディング流行りのような現象が起きていますよね。おもしろいなと思いつつ、アイデンティティのつくり方が同じになっている感じがして、少し違和感を感じます。本当はアイデンティティをつくる方法から設計するべきなのに、と。

●**佐藤**　それは本質をついた意見だと思うけど、特に今回のような国の機関がアートディレクターに依頼すること自体、すごく最近のことだよね。アイデンティティとは何かというレベルに来るにはまだ相当かかるような気がするけど、今の流れはいいんじゃないかな。

●**菊地**　でも美術館に限らず広告にしても、やっぱり可士和さんがつくられたような方法論が再生産されていく感じで、気になるんですよ。表面の意匠に目を奪われて、ブランディングやアートディレクションが類型化している気がするんです、最近のADブームって。

●**佐藤**　また僕の仕事は、表面的に真似しやすかったりするしね（笑）。

●**菊地**　その中で、可士和さんのお仕事の気持ちよさは、いつも視点が俯瞰してるところだと思うんです。

右／開館記念展告知ポスター
CD＋AD：佐藤可士和　D：石川 耕

下／施設サイン
CD＋AD：佐藤可士和　D：石川 耕

たとえばTSUTAYAの仕事ひとつとっても、ああ、この人は東京の街を俯瞰して見てるんだなと。上空から見渡して手をいれていく。「神の手」とでもいいますか。

●**佐藤**　どれだけ大局観が持てるかというのはありますね。すごく引いた視点と、仕上げるためのミクロの視点の幅が大きければ大きいほどダイナミックな感じになると思っていて。科学用語に「ディタッチメント」という言葉があるんだけど、意識的に距離を置くというか、普遍的な理論を発見するには、ディタッチメントがどれだけ持てるかということが重要だと。そういった神の視点を持てる人が優秀な科学者と言われるらしいんだけど、アートディレクターもそうありたいものだなと思っています。

佐藤可士和　Kashiwa Sato

1965年東京生まれ。(株)博報堂を経て「サムライ」設立。スマップ、Mr. Childrenなどミュージシャンのアートワーク、キリン極生、生黒、キリンレモンの商品開発から広告キャンペーン、TSUTAYA TOKYO ROPPONGIのVIと空間ディレクション、楽天グループ、明治学院大学のブランディング、NHK教育「えいごであそぼ」のアートディレクション、NTT DoCoMo「FOMA N702iD」のプロダクトデザインなど。最新の仕事はユニクロNYグローバル旗艦店のクリエイティブディレクション。
東京ミッドタウン「ガレリア」にオープンする「可不可」では、「暗闇坂 宮下」を展開する宮下大輔、インテリアデザイナー片山正通と共に、アートディレクターとしてレストランという“場”から「新しい和の形」を発信していく。

六本木は□□□みたいだ。

六本木は□□□□化できるはずだ。

□□□、六本木にも□□はある。

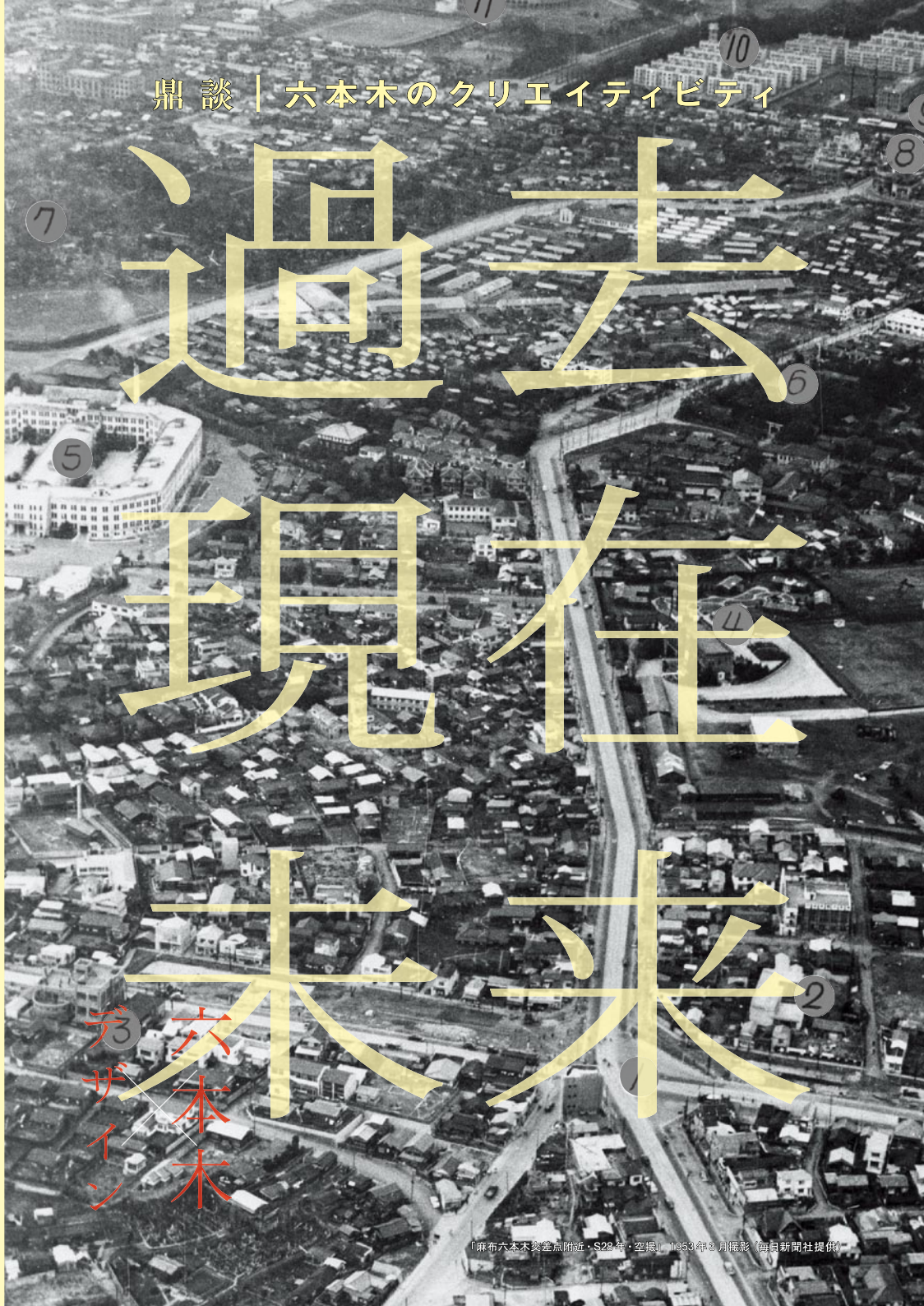
□□□う□□□□　六本木の朝は□つ□□い。

Photo : Yukihiko Uda　Copy : Daisaku Fujiwara

鼎談｜六本木のクリエイティビティ

六本木 過去 現在 未来

六本木デザイン



「麻布六本木交差点附近・S28年・空撮」1953年3月撮影（毎日新聞社提供）

喫茶店「アマンド」で有名な六本木交差点。ここを中心に直径約1キロの円を描く。するとそれがほぼ、今日「六本木」と呼ばれる街だ。東は飯倉片町、西は西麻布、北は赤坂との境界あたり、南は麻布十番まで。江戸時代には青木氏、一柳氏、上杉氏、片桐氏、朽木氏、高木氏などの大名屋敷や寺などが立ち並んだといわれ、六本木の名称はいずれも木に関係する6つの大名からとも、また6本の松があったからだともいわれている。

明治維新ののちはお屋敷町となり、また現在の7丁目には陸軍歩兵第三連隊、隣接する赤坂9丁目には第一連隊が置かれるなど、日本軍兵士の街ともなった。さらに1945年の第二次世界大戦敗戦後はアメリカ軍によりその敷地が接収され、"バーディバラック"と呼ばれた兵舎が林立、そうした米兵を相手にした店が飲食店を中心に急速に発展していった。そして52年。対日講和条約の発効により日本占領は終わり、第一連隊跡に防衛庁ができる。これが2007年3月オープンの「東京ミッドタウン」の敷地となった。一方の第三連隊跡には、東京大学生産技術研究所を経て、2007年1月、「国立新美術館」が開館している。

明治時代以降の「六本木町」は現在の六本木交差点付近の名称だったが、1967年、このほかに竜土町、三河台町、今井町、材木町、鳥居坂町、飯倉片町の一部、北日ヶ窪町など麻布地区北部一帯の住居表示の再編成とともに、六本木1丁目から7丁目が誕生。それに先立つ55年には国際親善と知的交流を目的とした国際文化会館ができ、またスペイン大使館やスウェーデン大使館ができるなど、国際色豊かな街として、今日も独自の地位を保っている。

と、ここまでが本編のための予備知識。ここからは立川直樹氏、島本脩二氏、長友啓典氏のお三方をお迎えし、60年代以降今なお脈々と変容をとげ続ける、六本木のクリエイティビティのルーツを探ってみることにしよう。

鼎談

「六本木のクリエイティビティ」過去・現在・未来

【司会】秋田 寛（グラフィックデザイナー／JAGDA広報委員長）

立川直樹（たちかわ・なおき）
プロデューサー、ディレクター。1949年東京都生まれ。「メディアの交流」をテーマに、音楽、映画、美術、舞台など幅広いジャンルで活躍。メディア・ミックス「ルキノ・ヴィスコンティ・プロジェクト」や「ゲンズブール・プロジェクト」をはじめ、「マルサの女」以降の故伊丹十三監督作品の映画音楽、横尾忠則「瀧狂」、篠山紀信「食」展覧会プロデュースなどがある。桐朋学園芸術短期大学教授。東京都歴史文化財団アドバイザー。

×

島本脩二（しまもと・しゅうじ）
小学館出版局歴史・美術・古典プロデューサー・編集長。1946年新潟県生まれ。1970年早稲田大学卒業後、小学館入社。『GORO』や『写楽』（AD：長友啓典）編集部員を経て、のち『ピー・アンド』、『TOUCH』、『週刊美術館』などの編集長。『日本国憲法』（D：松永真）、石川賢治写真集『月光浴』（D：坪内祝義）などのベストセラーを多数企画編集。2001年紙百科ギャラリーにて「編集者の個展」開催。

×

長友啓典（ながとも・けいすけ）
グラフィックデザイナー。1939年大阪府生まれ。1961年桑沢デザイン研究所卒業後、日本デザインセンター入社。1969年黒田征太郎とK2設立。エディトリアルデザイン、広告およびイベント会場構成のアートディレクション、また伊集院静『犬からひとこと』など小説の挿絵、雑誌のエッセイなどを手がける。著書に『まっかなホント』、『アート・ディレクターの発想・現場・定着』などがある。東京造形大学客員教授。

「ちょっと行きにくくて入りにくい街――、だから平和な村が守られていた」

◎――僕は高校まで三重県にいたので、テレビでしか六本木を知りませんでした。有名な「アマンド」のある交差点とか、西麻布とか。80年代初めに東京の大学に入学して、その憧れの六本木に行ってみても、今ひとつピンとこなかった。でもここには昔からすごいパワーがあったんですよね。今日は六本木の達人とも言えるお三方に、僕たちの知らない六本木をたっぷりと教えていただきたいと思います。

【立川】 80年代では六本木もだいぶ変わっていますよね。僕が足しげく通うようになったのは60年代。もともと六本木は山手線も通ってないし、地下鉄の日比谷線はあったけれどすごく不便で、ちょっと特殊な人たちが集まっていたところだった。

【島本】 日比谷線が通ったのはいつごろだったんでしょうね。

【立川】 1964（昭和39）年。当時できたばかりでした。僕は浅草の生まれで、もう14歳ぐらいから六本木に遊びに来ていた。中学校ぐらいですか、ませてたんでね。ずいぶん楽しませていただきました。だから60年代半ば以降の六本木は全部知っている。今はなくなっちゃったけれど、当時は書店の「誠志堂」が3軒ありましたからね。六本木の交差点にあった新刊書の誠志堂、俳優座の真ん前の間口がわりと大きい古本屋さんの誠志堂、その横のイタリアンレストランの通りにも新本と古本を置いていた誠志堂があった。俳優座前の誠志堂のおやじが結構面白くてね。当時アメリカ兵が、読み終えた『PLAYBOY』なんかを全部その古本屋に売るわけですよ。アンダーヘアが見えているようなのをね。高校生の僕らが行くと、おやじが3冊いくらで買わないかと。で、買うと、浮世絵もあるぞといって。でも澁澤龍彦などもちゃんとしっかり置いてあって、その感じが六本木だった。

【島本】 その昔はタヌキが出たという「狸穴（まみあな）」があったりして、圧倒的に不便な場所でしたよね。僕が通い始めたのは70年代半ばぐらいですが、当時もアクセスは悪かった。何となく遠いし、「六本木族」や「野獣会」がメディアを通して紹介されていて、何かこうちょっと入りにくい、行きにくい感じでしたね。

【立川】 でも好きだった人には、逆に平和な村が守られていたという感じがあった。もともと六本木はあまり集団で遊ぶ土地じゃなくて、多くて4人。クルマ1台で移動できる、そんな感じだったと思う。

1959年頃の六本木交差点。
正面に誠志堂が見える（港区立港郷土資料館提供）

アマンド
戦後の洋菓子・喫茶店の先駆け。1945年西麻布で創業。六本木店は63年交差点角にオープン。以来待ち合わせ場所ともランドマークともなっている。

地下鉄日比谷線
1961年南千住・御徒町間で開業。のち64年全線開通。同年の東京オリンピックに間に合わせるため突貫工事で建設が進められた。運営は東京メトロ。

誠志堂
待ち合わせの定番だった"交差点の角の書店"。大正末創業。創業者一族は同地でビリヤード場、玩具屋、輸入雑貨店などを営んだ。2003年閉店。

つるむことが苦手というか、下手というか、嫌いというか。大きい店もなかったしね。後年ディスコもたくさんできたけれど、新宿に比べたら「玉椿」にしろ何にしろ、小さかったよね。地理的に不便だということもあったけれど、入り込まないと何が面白いんだか分かんない街だよね、派手じゃないから。

◎――通りがかりで入るという感じは全くありませんでしたね。誰かが連れていってくれて、初めて、ああこういうところなんだと分かって、それから1人で行くとか。ガイドがいないと、最初は入れないような感じの街でした。

「新しい刺激が、新しいコラボレーションを生み出していた」

【立川】 高級イタリアンレストランのはしりの「キャンティ」だって、ドラマで有名にはなったけれど、ちょっと分かりにくいよね、当時1階はブティックだったし。

【長友】 大阪にいると、東京には「キャンティ」があるっていう情報が刷り込まれるじゃない。で、初めて上京すると、やっぱりまずモダンジャズの喫茶店とイタ飯の「キャンティ」に行くわけですよ。

【立川】 でも行ってみると「あれ?」と思うでしょう。わりと地味な店で、やっぱり結構拍子抜けするよね、あれは。

【長友】 僕が東京に来たのが映画「三丁目の夕日」やないけれど、東京タワーがちょうど建築中の頃、1958(昭和33)年やった。「世界デザイン会議」が東京の青山であった60年には桑沢デザイン研究所に通っていて、64年、東京オリンピックの時に日本デザインセンターに入社、69年に「K2」を青山に設立して、70年に六本木に移った。

【立川】 1968年ぐらいだと思うけど、今の「後藤花屋」の2階にディスコがあって、大阪から出てきたピーター(池端慎之介)がゴーゴーボーイをやっていた。かわいかったんで、男の子で初めてゴーゴーボーイになったんですけどね。

【長友】 ゴーゴーですものね、当時は。

【立川】 ええ、丸い台の上で踊って、お立ち台の原型みたいなものだったね。

【島本】 踊りのインストラクターだったんですよね。こう踊ると格好いいという。やっぱり六本木はミュージックビジネスがすごく早く発展した。

【立川】 音楽というか、エンターテインメントというか、芸能人が多かった。素人が少なかったから自由に来ていて、解放区みたいに遊べているところだったね。

【長友】 ジャズクラブも多かったですものね。僕が初めてマッチやコースターをデザインしたのがマキノ正幸の「マックス・ホール」で、ピアニストなんかとちょっと知り合いになっておくと、ここぞという時にいい曲弾いてくれるわけよ。

【立川】 そのために通ったりしてね(笑)。さっきの誠志堂もそうだけど、六本木には文化の流れみたいなものがすごくあったと思う。のちに「WAVE」ができ、「ABC(青山ブックセンター)」が夜遅くまでやっているという80年代以降のカルチャーは、この60年代からすごく自然なかたちでつながっていったような気がする。今普通になったレイトショーも、実は俳優座劇場の「シネマテン」が最初なんです。僕が30代くらいかな、ヘラルドの人に「夜映画見られないのはつまらないよね」と言ったら、「面白いからやろうか」って。それで俳優座が終わった後の10時から映画を始めて、それが先駆け。六本木ってそういう自由がすごくあった。

【長友】 俳優座も光り輝いていましたよね。あの辺の一杯飲み屋には、千田是也とか当時ばりばりの人がいっぱい来ていて、上がりかまちで議論を戦わせているのを端っこで飯を食いながら見ていたものです。

【立川】 劇場があって、クラブがあって、その周りに、人が集まる場がうまく介在していた。働いている人たちが仕事の後に飲みに行くから、どうしても遅くなる。遅くまでやっているから、テレビ局の人たちも来る。それが新しい刺激となって、今でいうコラボレーションみたいな、「何かやろうよ」ということになる。だから俳優座は日本の劇場でも、一番早くコンサートをやったよね。僕は日野皓正とムッシュ(かまやつひろし)がジョイントしてすごいライブをやったコンサートを俳優座で見てるんですよ。

「新宿は吐き出す享楽。でも六本木は吸収する享楽だった」

【長友】 ゴールデン街のきれい版みたいな、ね。

【島本】 新宿だと人と人の距離が近いんですよ。こういうふうにくっついて、「今度オレは映画をやるからさ、頼むよ」とかって。体温まで伝わってくる。

【立川】 汗くさいんだよね(笑)。

【島本】 でも六本木は人と人の距離がちょっとあっ

狸穴(まみあな)
麻布台から西麻布へ下る斜面に今も残る地名(麻布狸穴町)。"まみ"とはタヌキやムササビをさすといい、「狸穴坂」の下に巣穴があったと伝えられる。

六本木族
1960年代初頭、深夜遅くまで六本木にたむろして遊ぶ若者たちをこう呼び、スキャンダラスな話題としてしばしば週刊誌などにも取り上げられた。

野獣会
1959年、のちの俳優・田辺靖雄が16歳で結成。六本木を拠点に井上順、大原麗子などタレントやデザイナー30名あまりが集った。「野獣会オールスターズ」というバンドも結成されている。

玉椿
スクウェアビルにあったディスコ。ニュー・ウェイブの一味違った選曲で人気を博し、ファッションや広告の業界人が多く集ったことで知られる。

キャンティ
1960年飯倉片町交差点近くにオープン。設計にはル・コルビュジエの弟子・村田豊が参加。1階の「ブティック ベビードール」からは、グループサウンズ全盛期のステージ衣装の数々も生み出された。

マックス・ホール
マキノ正幸(現沖縄アクターズスクール校長、父は映画監督のマキノ雅弘)が1967年に開店・経営したジャズクラブ。

WAVE
1983年オープンした日本初の音楽文化大型複合施設。西武セゾン系。レコードやCD、書籍などの店舗とスタジオ、レストランからなり、音楽とCGを含む映像を融合した文化の発信基地となった。99年閉店。

ABC(青山ブックセンター)
芸術書、デザイン書などを中心とした品揃えで知られる書店。1980年には六本木店をオープン。朝5時までの深夜営業を行い、プロのデザイナーやアーティストの人気を集めた。

俳優座
1944年千田是也、小沢栄太郎ら10名の同人で発足した新劇の劇団。54年六本木に「俳優座劇場」をオープン。改装を経て、今日も上演を続けている。

俳優座シネマテン
1985年、俳優座公演終了後の22時から始まる、レイトショー専門のミニシアターとしてスタート。メジャーにかけられない秀作の発表の場ともなった。

1954年オープン当時の六本木俳優座劇場。
(港区立港郷土資料館提供)

六本木のクリエイティビティ

過去 現在 未来

■1590（天正18）年、徳川家康江戸入府

■1650（慶安3）年、毛利元就の孫・秀元が麻布日ヶ窪（現六本木ヒルズ周辺）に上屋敷を置く

■俳人・服部嵐雪（1654〜1707年）、六本木の情景を「あな悲し蔦に取らるゝ蝉の声」と詠む

■1721（元禄16）年、麻布日ヶ窪毛利上屋敷にて赤穂浪士自刃

■1849（嘉永12）年、明治時代の陸軍大将・乃木希典誕生（現六本木ヒルズ周辺）

■1874（明治7）年、歩兵第一連隊、第三連隊創設

六本木と赤坂に置かれる

■1923（大正13）年、六本木経由、四谷・浜松町間、都電33系統操業（1969年廃業）

■1924（大正14）年、六本木経由、渋谷・新橋間都電6系統操業（1967年廃業）

■1936（昭和11）年、麻布第三連隊が中心となり「2・26事件」勃発

■1945（昭和20）年、5月の大空襲でほぼ壊滅。同年8月終戦、連隊跡が占領軍により接収

■1952（昭和27）年、対日講和条約発効により アメリカ軍による占領が終息

■1954（昭和29）年、「俳優座劇場」オープン

イタリアンレストラン「ニコラス」（麻布台）開店

■1955（昭和30）年、前川国男らの設計による国際文化会館（六本木5丁目）完成

■1958（昭和33）年、東京タワー完成

■1959（昭和34）年、日本教育テレビ（現テレビ朝日）開局。このころ、「六本木族」や「野獣会」が話題となる

■1960（昭和35）年、第一連隊跡に防衛庁建設（〜2000年）

イタリアンレストラン「キャンティ」創業

■1961（昭和36）年、渡辺マリ「東京ドンパ娘」大ヒット。第2次六本木族台頭

■1962（昭和37）年、第三連隊跡に東京大学生産技術研究所が移転（〜2001年）

笹沢佐保の小説『六本木心中』が話題となる

■1963（昭和38）年、「アマンド」六本木店オープン

■1964（昭和39）年、東京オリンピック開催に合わせ地下鉄日比谷線開通

バー「ジョージ」オープン（2005年閉店）

■1967（昭和42）年、住所表示整理再編により「六本木1〜7丁目」誕生

■1971（昭和46）年、「パブ・カーディナル」オープン

■1977（昭和52）年、六本木ピットイン、オープン（2004年閉店）

■1980（昭和55）年、「ABC六本木店」オープン

■1981（昭和56）年、「AXIS」オープン

■1983（昭和58）年、「WAVE」オープン（1999年閉店）

■1984（昭和59）年、ディスコ「マハラジャ」麻布十番店」オープン、空前のディスコブーム起こる

アン・ルイス「六本木心中」ヒット

■1985（昭和60）年、映画「トイレット・ショー」（俳優座シネマテン）開始

■1986（昭和61）年、荻野目洋子「六本木純情派」ヒット

■1991（平成3）年、麻布十番を経由する地下鉄南北線操業

■2000（平成12）年、六本木、麻布十番を経由する地下鉄大江戸線操業

■2003（平成15）年、「六本木ヒルズ」オープン

■2005（平成17）年、「ヒルズ族」が話題となる

■2007（平成19）年、「国立新美術館」（東大生産技術研究所跡）開館

「東京ミッドタウン」（防衛庁跡）オープン

白谷達也氏撮影による2006年の六本木

て。体をくっつけるんじゃなくて、会話で自分の考えを伝えるみたいな、そういう距離がちょっと広かったですね。それは大人っぽいですから、最初はなかなか入り込めない感じでしたね。

【立川】 大人っぽいっていうのは、すごく言える。ルイ・マルの「死刑台のエレベーター」のような、何かこうクール感のある景色だよね。

【長友】 大人っぽいってすごくわかるけど、銀座だって大人っぽいじゃない。

【島本】 銀座は何か観光地の感じがしたし、エスタブリッシュだったんだな。

【立川】 銀座は、スーツを着ている人がネクタイをしている町なんだ。六本木は、Tシャツとかポロシャツでスーツを着ちゃうような街。新宿や渋谷にはスーツはない。

【島本】 ちょっと古くなりましたけど〝ちょい悪〟の街ですよね。僕はお二方よりずっと遅い六本木デビューで、大学時代はもっぱら新宿でした。やっぱり安いし、60年代終わりからの熱気がまだくすぶっていましたから。入社後も『週刊ポスト』の編集部だと、どっちかっていうと新宿なんです。それが六本木に行き始めたのは、やっぱり音楽の仕事。音楽関係のことをやり始めたのがすごく大きかったですね。内田裕也さんに会おうと思うと、じゃあ六本木で、と。

【立川】 今思うと、新宿ってニューヨークっぽかったのかな。コマ劇場の周りに繁華街があって、ブロードウェイにちょっと似ているんだよね。六本木はというと、ちょっと昔のパリのカフェ文化を標ぼうしていた感じがあったような気がする。今でいう風俗っぽい店は表には一切なかったし。その違いは、たとえば新宿と六本木の「ピットイン」を比べてみるとわかりやすいかもしれない。新宿の「ピットイン」は在野っぽいけれど、六本木の「ピットイン」は、もしかしたらフュージョンブームはあそこがあったからこそできたと言われているぐらい、小じゃれていた。簡単に言うと、新宿がセックス・ピストルズやニューヨーク・ドールズだとすると、六本木はデビッド・ボウイとブライアン・フェリーなんだね、気分として。

【島本】 僕が最初に坂本龍一を見たのが六本木の「ピットイン」なんです。何かこう輝いていて、びっくりしましたね。「あの人誰?」って聞いた覚えがありますから。

【立川】 新宿って、〝しちゃって終わり〟みたいな感じだった。でも六本木って、行くと何かあるぞみたいな。そういう意味で六本木は、何かを必ず生み出して、オリジナルじゃないかもしれないけれど、すごくおしゃれな加工をするのがうまい街だと思う。パリっぽいものをうまくそしゃくしてまとめるとか。新宿は、たぶん吐き出す享楽だった。でも六本木って、吸収する享楽だったと思う。

長友啓典が手がけた六本木のバーのデザイン
右から「オブ」「ホワイト」「うふふ」

「知らず知らずに、文化のシャワーというかね、浴びるんですよ」

【島本】 80年代にカフェバーが出てきた時、六本木にふさわしいなっていう感じがしましたよね、すごく。パリのカフェのようにしょっちゅういろんな人が来ていて、それがわりと固定している。で、今何をやっているかとか、こんな面白いものがあったとか、そういうやりとりをリラックスしてやっている感じが、東京の街の中では一番あった。

【立川】 やはり六本木はたまり場だったんです。その頃はどの店もそうだったけど、「パブ・カーディナル」や赤坂の「ビブロス」では、いつも行く人の席が暗黙の了解で決まっていた。この席はマチャアキ(堺正章)とか、川端康成はいつもここだからみんなどけとかね。植草甚一さんも1人でふらっと来ていたからね。

【長友】 本当にいろんな人に出会えた。

◎――長友さんは、どうして六本木に事務所を構えられたんですか。銀座や青山に比べるとデザイン事務所の数はそんなに多くないですよね。

【長友】 フリーで事務所を構えるとなると、やっぱり銀座、青山なんですよ。だから最初は青山で、インテリアデザイナーの倉俣史朗さんとお隣り同士でやっていた。で、倉俣さんがそこを出て六本木に行くというので、じゃあ一緒に出ましょうと。僕は銀座で探したけれど、高いわけよ。それで六本木に行ったら、六本木はもっと高かった。でも大家のおやじは占いをする人で、「僕たちお金がないんですけれど」と言ったら一番上の部屋をこっちの条件で貸してくれた。占った結果、君たちは大成すると(笑)。

【島本】 当たってますよね(笑)。

【立川】 僕が住んで、のちに事務所にした建物は、フランク・ロイド・ライトの弟子がつくったという4階建ての木造モルタルでした(笑)。以前はフランス人の医者が住んでいて、隣はインド大使館員、下は米軍の「スターズ・アンド・ストライプス」紙の記者。不動産屋からは日本人には向かないと言われたけれど、バスルームとかもいちいちおしゃれで、一目で気に入って借りたんです。今はもう取り壊されたけれど、『アンアン』などが撮影で使ったりして、家賃を稼いでくれたこともあった。結局ここには38年住みました。今も片町住まいで、やっぱり六本木を離れられない。

【長友】 僕の事務所の界隈だけでも、そのころ「外人バー」というたけど、アメリカっぽいバーが何軒かあったしね。

ピットイン
「新宿ピットイン」はジャズライブハウスの老舗。1977年にオープンしフュージョンの殿堂と呼ばれた「六本木ピットイン」は、カシオペア、スクエアを輩出、またYMO結成の舞台ともなった。2004年閉店。

パブ・カーディナル
1971年創業。パリのカフェをモデルとした24時間営業のパブ&レストラン。ヨーロッパ風のインテリアが話題となり、ファッションデザイナーなど多くの文化人が集う情報交換・発信の場ともなった。

【立川】 とにかく「スターズ・アンド・ストライプス」紙はものすごく影響している。星条旗通りってべつに洒落てつけたんじゃなくて、文字通りなんですよ。ベトナム戦争の頃には「ジョージ」などにも現役の米兵が出入りしていて、ダイレクトにレコードを持ってきていた。誠志堂にも洋書の『VOGUE』や『ELLE』などがすごくたくさんあって、しかも安かった。その文化の流れはジャズクラブやさっきの「WAVE」などにもずっとつながっている。

【島本】 外国の風が吹いているという感じが、当時はなんだかありがたかったですね。たとえば立川さんなどのように、いろんな外国に行って見たり体験してきた人がいて、一番新しい情報のおこぼれにあずかれる、そんな感じはありましたね。

【長友】 知らず知らずに、文化のシャワーというかね、浴びるんですよね。

【立川】 やっぱり70年代の「パブ・カーディナル」って、すごく面白かった。よく言えば、パリのサンジェルマン通り「カフェ・ド・フロール」や「リッツ」といった感じ。「パブ・カーディナル」が六本木発でつくった文化は、かたちを変えながら全国に広まったと、これは間違いなく言える。60年代から70年代に文化がややマスになっていった時、「パブ・カーディナル」の果たした役割はすごく大きいと思いますね。

「ちょっと背伸びして、格好いいものをつくるのに向いている街なんだよね」

◎――六本木には意識の高い人たちが集まっていたということでしょうね。

【立川】 その人たちが立ち寄るコーヒー屋さんやバーがあって、よくわからなくても俳優座へ行ってちょっと新劇でも見るかなみたいな、やや背伸びしつつ行くようなところがあった。「AXIS」なんかも、六本木だからできたんだと思う。ほかの街に比べて華僑が持っている土地が多いことと、大きな地主がいたりするので、その人たちが英断してどんどんやればできちゃうところがある。非常に複雑なのかダイナミックなのかわからないけれども、そうした開発や発展の仕方が、ほかの新宿や渋谷とはちょっと違うかもしれない。

短絡的な言い方をすると、格好いいものをつくるのに向いている街なんだよね。まず先行でそうしたものをつくっちゃって、あとで人がついてくる。それはもしかしたらヒルズもそうだし、ミッドタウンもそうかもしれないけど、最初にやや背伸びしたものを、安心してつくれる街かもしれないね。だったらとびきり格好よくやってくれたほうがいい。

【長友】 そういう意味で「AXIS」ビルはデザインギャラリーもあるし、デザイナーやカメラマンの事務所とか、デザイン関係の店を集めた、日本で初めての試みだったからね。

◎――六本木を訪れる人にとっても、ちょっと背伸びしているような感じがカッコよかったんでしょうね。

【立川】 そのままゆがみながら発展しちゃった(笑)。「マガジンハウス」や「キャンティ」、「ジョージ」などと挙げていくと、その時代の空気感がすごくよく出てきますよね。それから「WAVE」や「ABC」、「AXIS」と並べて、じゃあ今度は「Jトリップバー」と何かを並べていくと、エンターテインメントが台頭してきた六本木が浮かび上がるというように、いくつかの流れにきれいに整理できる。加えて「六本木ヒルズ」ができ「東京ミッドタウン」ができるという、大きなズドン、ズドンとした動き。ここに「国立新美術館」も加えられるよね。そうした大きな動きの潔さもある。

【島本】 六本木ヒルズができたときには、これはもともとどんな道、道路だったんだかわからないくらい変貌しましたよね。

【立川】 たぶんヒルズもそうだったんだけど、結局、建物は未来志向で建てるじゃないですか。でも今日本の街づくりにいちばん欠けているのは、建物はつくるけれど、その中でクリエイティブなものをつくる人を連れてこようとしないこと。箱はつくるけど、そこに入る人たちは不動産感覚で入れてしまう。でも街をつくるということは、もしかしたら誰に入ってほしいよねとか、じゃあ本当に可能性のある若いクリエイターにはチャンスを与えて、出世払いでいいみたいな、昔の大家さんみたいな感じも大事で、六本木ではぜひそういうことをやってほしい。だってもともと外国人も多かったし、いまだに商社やトレーダーも多いわけじゃない。そこに文化のトレーダーといったような人が出てくると、すごくいいと思うんですよね。

(2007年1月23日東京・赤羽橋「タワシタ」にて)

スターズ・アンド・ストライプス(星条旗新聞)
海外駐留米軍関係者向け新聞。米軍準機関紙として現在も多くの米軍兵士を読者に持つ。日本では六本木7丁目に本社があり、「星条旗通り」の由来ともなった。

ジョージ(Georges)
元防衛庁(現東京ミッドタウン)横のバーで、ソウルミュージックの梁山泊として知られた。1964年オープン。2005年閉店。後継者により「ソウルバー・ジョージス」として西麻布に移転。

「WAVE」が発行した雑誌
AD、D:戸田ツトム、1983年〜

AXIS
1981年、デザインのアクシス(座標軸)をコンセプトにオープン。日本では数少ないデザインギャラリーや専門ショップを持ち、80年代のデザインシーンで中心的役割を果たした。

マガジンハウス
1945年凡人社として発足。堀内誠一が参加した『平凡』『ポパイ』『ブルータス』などの雑誌で大衆文化をリードしてきた。71年創刊の『アンアン』編集部は六本木に置かれ、立木義浩、篠山紀信、大橋歩などが集った。

六本木ヒルズ
6丁目再開発計画の一環として2003年に開業した、六本木ヒルズ森タワーを中心としたビル群。企業テナントや店舗、最上階53階には森美術館があり、敷地内にはテレビ朝日本社ビルがある。

現在の六本木交差点

Photo (portraits and products): Kyoichiro Muraguchi

ステカンのある六本木

SUTEKAN in ROPPONGI

Photo：Keizo Kioku

ステカン、ステカン（捨て看板）は通称である。屋外広告物法、あるいは取扱い業者はこれを立看板と呼ぶ。一定の期間継続して公衆に対して表示され大概は「禁止された場所」にくくりつけられている。
屋外広告物法が定義するところの立看板は「木枠に紙、貼りもしくは布貼り（大概は不織布）をし、又はベニヤ板、プラスチック板、その他これらに類するものに紙をはり、容易にとりはずすことができる状態で立てられ、又は工作物等に立て掛けられているものに限る。」とされている。

：アマンド前

：ミッドタウン・ガーデン

：東京スカイショット

：青山墓地中央

六本木×デザイン

ROPPONGI FREEDOM

六本木フリーダム

01／1954年、六本木戦後復興の記念に建てられた「奏でる乙女」は本郷新の作品。もともとは違う場所にあり、ここに落ち着いたのは1975年だそう。休憩というよりは、待ち合わせの需要が多い。昼夜騒がしい交差点にあるが、ギターの巨匠ナルシソ・イエペスの名曲等を、ノイズキャンセラー装備のヘッドホンで聴きながら腰掛けると、そこはもうあなただけのリサイタル会場。フリーダム度＝★★★

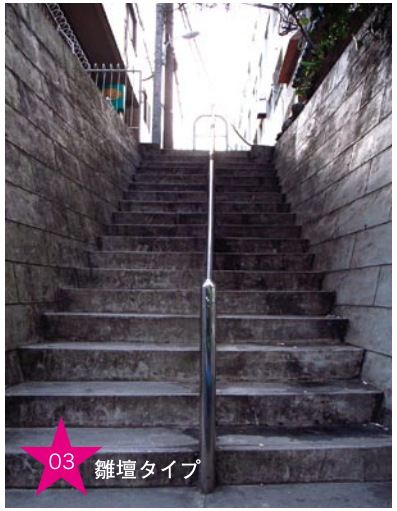
01 リサイタル会場タイプ

六本木、と聞いただけで財布の中身が気になる皆様。朗報です。ここで紹介する場所はいずれも、一銭のお金も使わずに過ごすことの出来る六本木のフリーダムスポット。平たく言えば無料休憩所のご案内です。アイデイアの枯れた脳を一休みさせるには持ってこいのオアシス。気分に合わせてお好きなタイプをお選びいただけます。LET' S TRY FREEDOM!!

04 スパニッシュタイプ

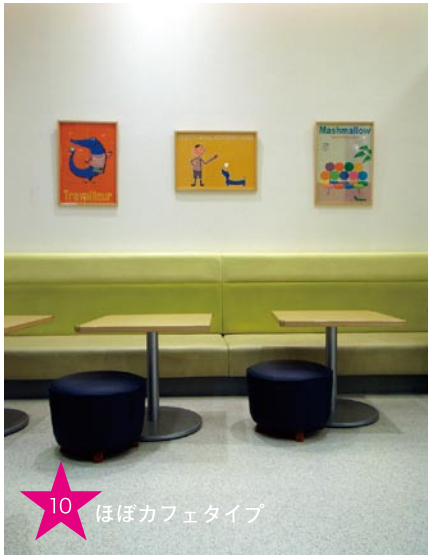
02 箱庭タイプ

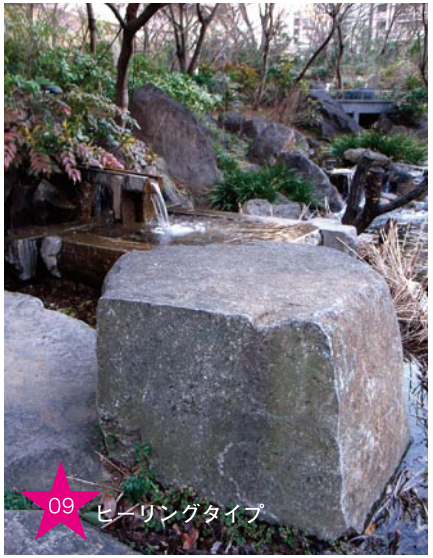
05 ピラミッドタイプ



03 雛壇タイプ

02／どうぞ腰掛けて下さいと言わんばかりの石垣は、座高ジャスト50cm。小さな池のボウフラなどを気にしながらも、椿の花に癒され、明日の締め切りを忘れてみる。フリーダム度＝★★★　03／真ん中でしっかりと仕切られた石段。どうやら左側は階段として、右側は雛壇として利用するという暗黙のルールがあるらしい。一段2人として、40人は軽く休憩できる。フリーダム度＝★★　04／ビルの一角に忽然と現れたアントニーの庭。なぜスパニッシュであるかは、主人がアントニーであるからにすぎない。フリーダム度＝★　05／ピラミッドです。利用しない手はありません。卵が腐らないんですから。科学では解明出来ないパワー。そんなアイディアを求めて。フリーダム度＝★★★





→本気で眠れるベッドタイプは徹夜明けのひとときに。フリーダム度=★★　08／まぁ、夏になれば気持ちよいだろう、どこにでもある休憩所。しかし注目すべくは左後方。見えますか？水色の猿が、いや女の子が木の上でのんびり！隣で休んでもいいですかぁ～♪彼女のフリーダム度=★★★★　09／ご存知の庭園で引っ張りだこの場所。それもそのはず、この池にはパンダよりも珍しい「宇宙メダカ」が棲んでいるのですから。宇宙エネルギーを全身に浴びてアイディアに変換！フリーダム度=★★★　10／え～と、カフェラッテひとつ、なんて注文しちゃいそうなこの休憩所。もちろん出て来ません。しかし休憩し放題！ただしお子様との同伴に限ります。ゆえにフリーダム度=★。

06／ある公園の一角。爆睡する旅行者はパキスタンから昨日到着したばかり（多分）。点在するベンチには、それぞれに一番楽なスタイルで自由を満喫中。隣のベンチ2台占有している、この公園の主であろうおばあちゃんに、なぜかご近所のおばさんが「あまりものだけど食べてぇ。」とお弁当を差し入れしていた。助け合う事の大切さを痛感。※後日談としてJAGDA会員であるS氏から聞いた話によると、この一見ホームレスのおばあちゃん、「この間ローリングストーンズ観て来てさぁ～」と息巻いていたという。スゴい。まさにNO MUSIC NO LIFE! デザインもこうでなくては！おばあちゃんのフリーダム度=★★★★★　07／ミッドタウンにほど近い公園。バランス感覚を養いながら←

ROPPONGI DESIGN CIRCUIT

六本木デザインサーキット

東京ミッドタウンのオープンによって
アート色の強まった六本木。
しかし六本木には古くから
デザインの風が吹いていました。
いつの時代も先端をゆく六本木の
デザインスポットをご紹介します。

L1-A

青山ブックセンター 六本木店

TEL 03-3479-0479

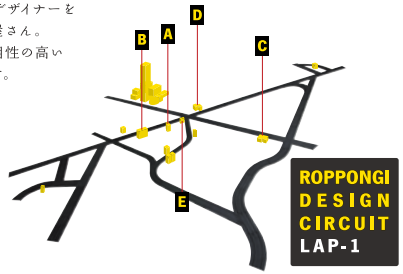
デザイン・アートが特に充実。終夜営業で、
誰もが一度はお世話になったはず。
クリエイターの頼もしい相棒です。

L1-B

六本木ラピスラズリ

TEL 03-3405-2821

創業32年。六本木界隈のデザイナーを
じっと見つめてきた画材屋さん。
店内はハイセンスかつ実用性の高い
ツールが充実の品揃えです。



アークヒルズ方面から西麻布近辺まで。
六本木交差点を中心としたエリアは
まるでサーキットのよう。坂も多く、
もしF1を開催したらさぞかしユニークかつ
難しいコースになるのでは。
モナコのような市街地レースを
イメージしてコースを設定してみました。

【RQの持つピットボードの見方】

L1-C

AXIS

TEL 03-3587-2781

いわずと知れたデザイン複合施設の
先駆け的存在。かつては東京デザイナーズ
スペースで伝説の「ONE DAY ONE SHOW」が
開催されていた。現在もギャラリーや
プロダクトを扱うショップ等から
感度の高い情報を発信しています。

L1-D 俳優座劇場

TEL 03-3470-2880

劇団俳優座の本拠地として昭和29年に完成以来、
新劇活動の中心地として運営されてきました。
今や当たり前のレイトショー上映も
ここ俳優座「シネマテン」が最初（P.31参照）。

L1-E イタリアンレストラン「シシリア」六本木店

TEL 03-3405-4653

六本木交差点にあるイタリアンレストラン。
アットホームかつ賑やかな店内はいつも
お客さんでいっぱい。深夜までやっているのも嬉しい。
壁の落書きは長い歴史と人々の茶目っ気が感じられ
ある意味アートです。

L3・K

デザイン事務所「K2」

六本木といえばこの2人、
アートディレクター・長友啓典と
イラストレーター・黒田征太郎が
主宰するデザイン事務所。
ここ六本木に事務所をかまえて
はや37年。当時は資金不足ながら、
大家さんに「大物になる予感がする」
と見込まれて入居(P.35参照)。
大家さんの直感は的中。
すごい…。

L3・J

GALLERY SIDE 2

TEL 03-6229-3669
今回のサーキットでは
最も長いストレートの先にある
美人女将・島田淳子さん主宰のギャラリー。
綺麗な箱型の展示室は
高い天井のためとても気持ちの良い空間です。
でも近々移転を考えているとかで、
「誰か居抜きで借りる人いない？」とのこと。

L3・M

JAGDA事務局 ミッドタウン・タワー5F

2007年、デザインハブ内に出現。
近藤康夫氏デザインの真っ白な空間は
新しいグラフィックデザインの
拠点となるべく誰もが気軽に立ち寄れる
空間造りとなっています。
会議室から見える檜町公園の鳥瞰は
一見の価値あり！

L3・L

ギャラリー ル・ベイン

TEL 03-3479-3843
交差点からは少し離れた西麻布の静かな
一角に真白い壁が印象的。中庭のある館内は
光に溢れています。この日は東京造形大学の
卒業制作展が開催中でした。

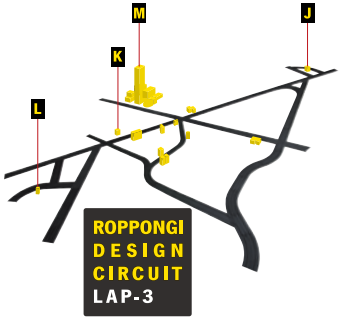


Photo: Hisashi Yoshino Model: Chiharu Tominaga Hair & Makeup: Maki Ishiguro Styling: Takehiko Asahi (arms) Clothes: Nao Nomura (zeroshiki)

L2・G

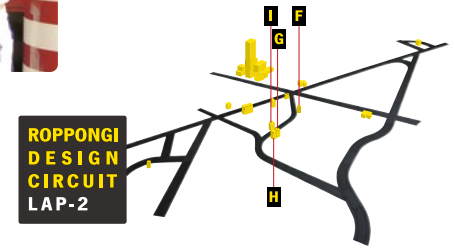
ストライプハウスギャラリー

TEL 03-3405-8108
2001年設立。展覧会の他にミニライブや一人芝居、
朗読会なども行っている。
確かもっと古くからあったと思ったが、
以前はストライプハウス美術館だったとのこと。
地下の洋書店もナイスなセレクトです。

L2・F

T&G ARTS

TEL 03-5414-3227
瀟洒なビルの1階にあるギャラリー。
取材の日は篠山紀信展が開催中。
作品の被写体に負けないように
こちらも気合いを入れました。



L2・I

ヴァイスフェルト(レントゲンヴェルケ)

TEL 03-3475-0166
2002年にオープン。最近の現代アートの活性化を
語る上で、このギャラリーの存在は
かかせない。この日はSimon Patterson
「The Last Supper」が
展示されていました。

L2・H バイク便「フリーラン」

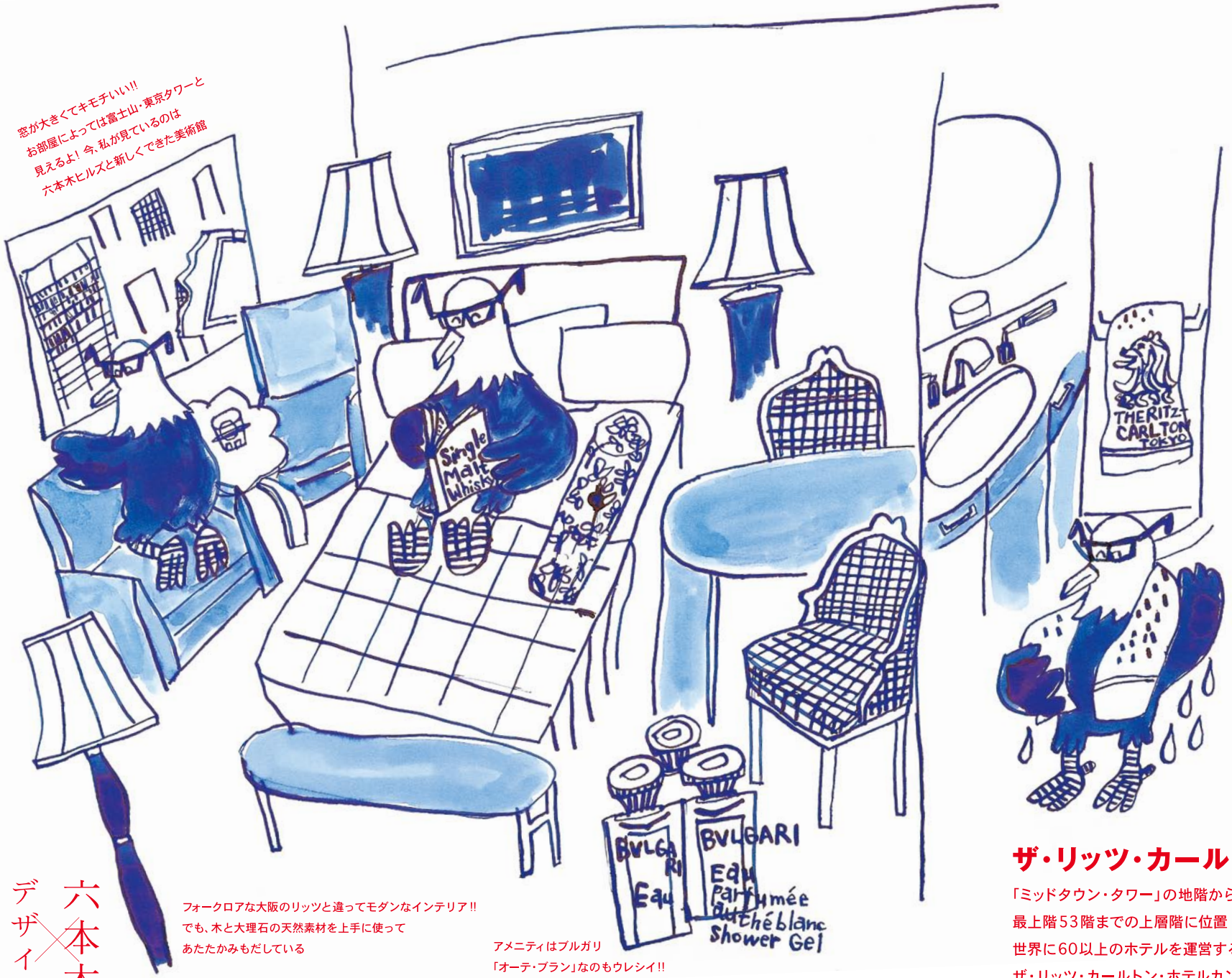
TEL 0120-67-1345
デザイン業務に欠かせないのがバイク便。
ここフリーランは24時間対応の頼もしい存在。
人手不足、突然の配達に是非！

ブラリちょっとミッドタウン

東京初！世界初！の東京ミッドタウン内の気になるスポットをのぞいてきました。

ザ・リッツ・カールトン東京

「ミッドタウン・タワー」の地階から2階と、45階から
最上階53階までの上層階に位置
世界に60以上のホテルを運営する
ザ・リッツ・カールトン・ホテルカンパニーL.L.C.の
グループホテルがやああっと、東京にできた!!



窓が大きくてキモチいい!!
お部屋によっては富士山・東京タワーと
見えるよ！今、私が見ているのは
六本木ヒルズと新しくできた美術館

フォークロアな大阪のリッツと違ってモダンなインテリア!!
でも、木と大理石の天然素材を上手に使って
あたたかみもだしている

アメニティはブルガリ
「オーテ・ブラン」なのもウレシイ!!

六本木デザイン

「ミッドタウン・タワー」B1F～2F・45F～53F　TEL 03-3423-8000

Equation du Temps

スウォッチ グループ ジャパンが擁する
スイスを代表する5大高級機械式複雑時計
（ブレゲ、ブランパン、ジャケ・ドロー、レオン・アト、オメガ）の
日本初マルチブランドコンセプトブティック

オメガ デ・ビル コーアクシャル×2
ビッグデイト ￥1,312,500
50m防水 パワーリザーブ48時間

色ちがい、デザインちがいで
2個づつください〜い!!
なんで時でもここだと
すぐに手に入る!!

ブレゲ・トラディション
￥2,625,000
2006年バーゼル発表（新作）

「ガレリア」1階　TEL 03-5413-3424

ファーバーカステル 東京ミッドタウン

ドイツの画材・筆記用具メーカー
ファーバーカステルの
日本初！世界で4番目の
フラッグショップ

パーフェクトペンシルプラチナコーティング
「ファーバーカステル伯爵コレクション」の1つ
世界一美しい鉛筆！
木材はきれいに削るためのカリフォルニア・シダー
シャープナーがキャップに内蔵されている

鉛筆の長さ、太さ、硬さの世界基準を
作ったのもブランド名を刻印して
鉛筆をプロダクト化したのも
ファーバーカステルが初めてだったって
知ってた？スゴイね!!

水彩色鉛筆24色（ペンスタンド入り）￥8,400（税込）
オールブラック12本入りの
ミッドタウン店オープン限定品もある！

「ガレリア」3階　TEL 03-5413-0300

◎六本木裏 アン事情◎

「あん」が肝心

浪花家総本店 麻布十番一丁目

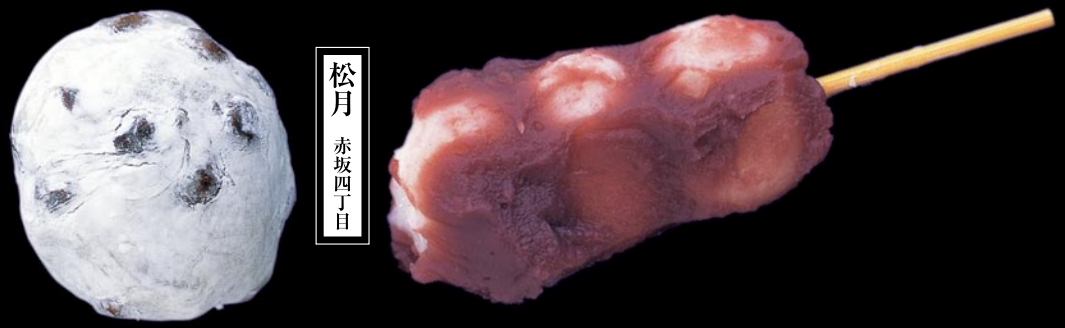
六本木×デザイン

Photo:Keizo Kioku

紀文堂 麻布十番二丁目

千鳥屋 六本木五丁目

「あん」が大切なのはデザインも和菓子も一緒。心に残るデザインはアンデア…いやいや、アイデアも優れていると思いませんか。お饅頭もいくら姿形が良くても「餡」が美味しくなければ、いただけません。新しいJAGDA事務局の周辺には、老舗の和菓子屋さんから町のお菓子屋さんまで美味しい「餡」が揃っています。「案」に詰まったら、甘い和菓子でもいかがですか。

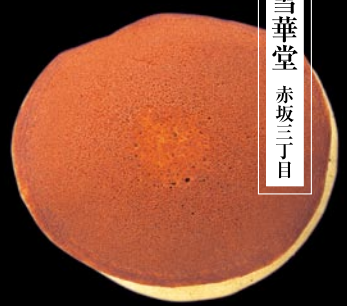


松月 赤坂四丁目

塩野 赤坂二丁目

塩野 赤坂二丁目

青野総本舗 六本木三丁目



雪華堂 赤坂三丁目

フォンテ六本木

19.02m²（＋バルコニー面積：1.28m²）

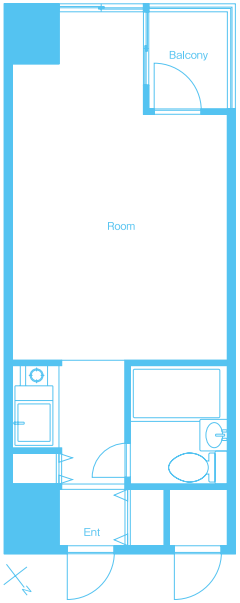
¥101,850（管理費込）

◎「ほぼミッドタウン」な立地
◎21_21 DESIGN SIGHT、サントリー美術館、国立新美術館に至近（JAGDAにも）
◎11階の最上階

独立の一歩、こんなコンパクトなお部屋から始めてみては？ SOHOとしても利用可能です。

共用の階段からはミッドタウン、
サントリー美術館、21_21 DESIGN SIGHTが
すぐそばに見えます。

窓の向こうには
国立新美術館がチラリと。



所在地：港区赤坂
東京メトロ千代田線 乃木坂駅 徒歩2分
都営大江戸線 六本木駅 徒歩3分
東京メトロ日比谷線 六本木駅 徒歩8分

六本木×デザイン

FOR RENT
Design Office

入居可能な
デザイン事務所向け
物件情報

六本木エリアを中心に選んだ
5件の物件を紹介します。
独立を考えているあなた、
もしくは引越しをお考えの
プロダクションの方、
いかがでしょうか？

photo：Keizo Kioku

発行時には物件が契約されている場合もございます。ご了承ください。また掲載しているプランと現況が異なる場合には現況を優先します。

打ち合わせ用の部屋に。

04

北青山ホームズ

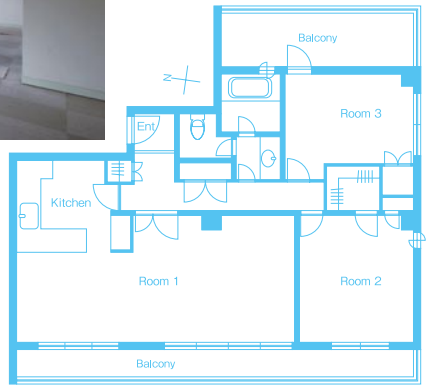
86.27m²

¥630,000（管理費・駐車場代込）

◎駐車場1台付

所在地：港区北青山
東京メトロ銀座・半蔵門線 青山一丁目駅 徒歩3分

窓の外には
公園が望めます。



05

テラアシオス南青山

188.36m²

¥1,029,059（管理費¥216,524）

◎根津美術館至近

所在地：港区南青山
東京メトロ銀座・半蔵門・千代田線 表参道駅 徒歩10分

広々とした細長い
形状を生かしてユニークな
空間をつくってみては。

物件の情報を提供していただいたのはグリーンシードさんとウィンズプロモーションさん。
両社とも本来は青山周辺の不動産に力を入れていらっしゃいます。

掲載されている物件へのお問い合わせ
01・02・04 → 株式会社グリーンシード　TEL:03-3400-5511
03・05 → 株式会社ウィンズプロモーション　TEL:03-5469-1385

※掲載物件は成約された場合、手数料10%引！（2007年5月末まで）

アルベルゴ乃木坂

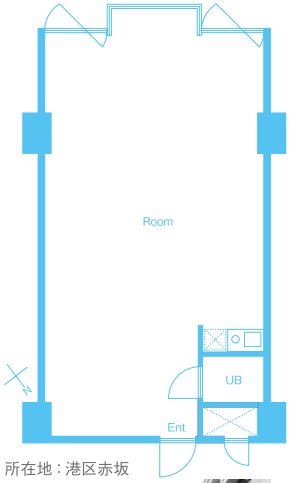
47.26m²

¥270,000（管理費込）

◎21_21 DESIGN SIGHT、
サントリー美術館、
国立新美術館に至近
（JAGDAにも）
◎1階には美味なイタリアン

02

使いやすそうなワンルーム。少人数の事務所に。



所在地：港区赤坂
東京メトロ千代田線
乃木坂駅 徒歩3分
東京メトロ日比谷線
六本木駅 徒歩7分

凹凸が
特徴的な外観。

パレス赤坂

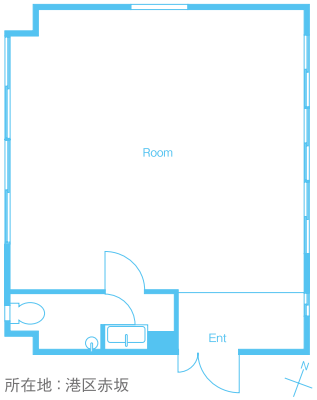
38.25m²

¥150,150（管理費 ¥8,400）

◎レトロな雰囲気
◎窓横の駐車場空有
（¥42,000）

03

良い意味で無造作な室内。リフォームしたら良い雰囲気がつくれそう。



所在地：港区赤坂
東京メトロ千代田線 乃木坂駅 徒歩4分

レトロな味わいのエントランスまわり。

六本木
デザイン

ROPPONGI NO KATACHI 'kami'

illustration : Ichio Otsuka ／ 協力：六本木美容室 www.roppongibiyoushitsu.co.jp

‘ジ’ by IAN KWOK（HONG KONG）
‘ャ’ by MARK DRISCULL（U.S.A.）
‘グ’ by JEAN-FRANÇOIS COQUAND（CANADA）
‘ダ’ by CHIARA M.（ITALY）
‘さん’ by INIGO TAMAYO（SPAIN）
‘六’ by NORA K.（U.S.A.）
‘本’ by KATIE B.（U.S.A.）
‘木’ by VIKAS TAYAL（INDIA）
‘へ’ by SCOTT CLAGUE（AUSTRALIA）
‘よ’ by JAVIER ESCUDERO（SPAIN）
‘う’ by EVA CHAN（HONG KONG）
‘こ’ by GONZALO VELEZ（COLUMBIA）
‘そ。’ by KEREN HERNANDEZ（CANADA）

六本木デザイン

ROPPONGI NO KATACHI 'gaijin-moji'

［引越しレポート］

THANK YOU! JINGUMAE

JAGDA事務局引越し計画は3ヶ月前から始まった。

クルクルと丁寧な仕事の財津さん。

ポスターの整理を1ヶ月も続けた竹本さん。

公私ともに引越しが続いた清水さん。

いつもより働いてますね、近藤さん！

一番大切な物です、会員名簿。

この日、片付けは深夜まで及びました。

松山さんは、引越しもマイペース。

エプロン姿が色っぽい工藤さん。

諫山さんは、朝の6時まで片付けてました。

2月14日、JAGDA引っ越しの日は雨でした。

8時48分、日通さん到着。引っ越しの開始です。

荷物の間から撮影する、カメラマン木奥さん。

9時32分、第一便が六本木へ。

ゴミ袋にも、ヴィジュアロークのテープが役立っています。

11時30分、全ての荷物の搬出を完了。

スッキリした部屋は、ちょっと寂しいですね。

14年間、お疲れさまでした。

THANK YOU! JINGUMAE

HELLO! ROPPONGI

今度の事務局は、ミッドタウン・タワー5階になります。

10時3分、ミッドタウンにトラックが到着。

エレベーターの奪い合いで、荷物が到着したのは昼過ぎでした。

傷ひとつ付けない仕事は、さすがです。

配置図に合わせて、荷物の移動開始。

事務局のインテリアデザインは、「東証アローズ」「カッシーナ・イクスシー」などを手がけた近藤康夫氏。

柴田さん、写真が少なくてすみません。

演技でなく、本当に疲れた様子の近藤さん。

17時、とりあえずの荷物が入りました。

澤村さんのような、パソコン関係に強い人がいると助かります。

ヴィジュアローグのT-シャツがいいですね、工藤さん。

諫山さん、早速仕事ですか？

［訪問レポート］

HELLO! ROPPONGI

JAGDA新人賞受賞作家作品展2007
6月4日〜29日クリエイションギャラリーG8（東京・銀座）にて開催。
また、大阪、滋賀、新潟、福岡、愛知への巡回を企画中。

新しい事務局を、2007年度JAGDA新人賞受賞者の3人が訪れました。

軍司 匡寛［GUNJI Tadahiro］ 1978年福井県生まれ埼玉県育ち。2002年東京芸術大学デザイン学科卒業。同年、株式会社日本デザインセンター入社。
まさにJapan Graphic Designers Associationである「JAGDA」になった印象を受けました。なかなか見られない、グラフィックの名作ポスターの実物やいろ

小林 洋介［KOBAYASHI Yosuke］ 1975年新潟市生まれ。明治学院大学文学部在学中、亀倉雄策のポスターに偶然出会い、方向転換。2000年、有限
事務局には年1回、年鑑への作品応募の時に訪れていましたが、一気にあかぬけた感じがしました（笑）。普段もフラっと行けるような、オープンなスペースにな

古屋 友章［FURUYA Tomoaki］ 1973年埼玉県生まれ。1997年慶應義塾大学環境情報学部環境情報学科卒業。2002年多摩美術大学美術学部
話題のエリアに「DESIGN HUB」というスペースができるということで、デザインの時代が本当に来たんだなと思いました。プロダクトや建築、全然違う分野の

2006年、小磯デザイン研究室設立に参加。現在、同研究室在籍。グラフィックデザイナー、映像ディレクター。one dot zero、RESFESTなどにて作品上映。
いろいろな資料が見られる場になってほしいです。

会社E.に入社。最近の仕事に、三菱UFJ信託銀行、リクルートメディアコミュニケーションズ、START TODAY、クロスマーケティングなど。
ったのはいいですね。

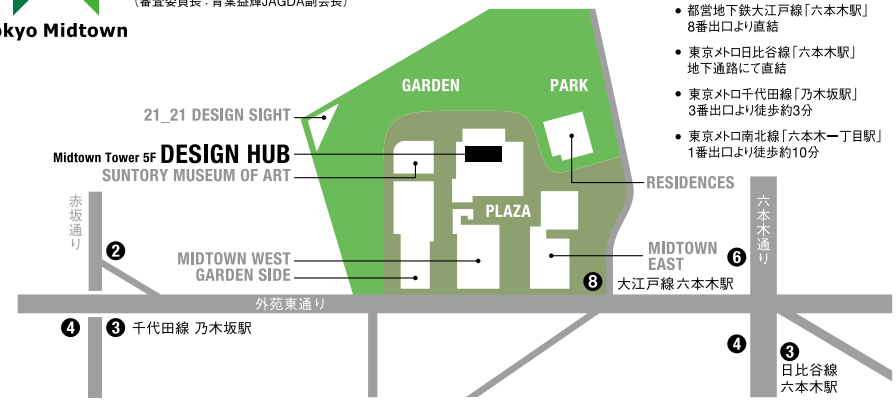
グラフィックデザイン学科卒業、株式会社ドラフト入社。2003年TDC賞受賞、世界ポスタートリエンナーレトヤマ入賞、2006年日経広告賞・部門賞受賞。
人とのつながりも持てる、人同士をつなぐHUBにもなることを期待します。

東京ミッドタウン・デザインハブ

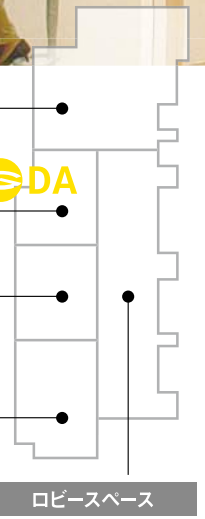
2007年3月30日、東京・六本木の防衛庁跡地。緑地がその4割を占めるエリアにオフィスや商業施設をはじめ、住宅、ホテル、美術・デザイン施設までを備えた新しい「街」、東京ミッドタウンが誕生しました。
中央にそびえるのは都内一の高さを誇るミッドタウン・タワー。その5Fに「東京ミッドタウン・デザインハブ」は開設されました。振興機関、デザイナー団体、デザインに関わる教育研究機関の連携によって日本と世界のデザインをつなぎ、広め、育てていく新しい拠点です。展示や講演、ワークショップや産学協同プロジェクトを通じ、デザイナーの人材育成やデザイン産業の振興、デザイン情報の受発信などを展開します。

D：原野敦史
公募によって寄せられた世界45ヶ国
7,893作品の中から決定
（審査委員長：青葉益輝JAGDA副会長）

Tokyo Midtown



- 都営地下鉄大江戸線「六本木駅」8番出口より直結
- 東京メトロ日比谷線「六本木駅」地下通路にて直結
- 東京メトロ千代田線「乃木坂駅」3番出口より徒歩約3分
- 東京メトロ南北線「六本木一丁目駅」1番出口より徒歩約10分



（財）日本産業デザイン振興会（JIDPO）

「グッドデザイン賞（Gマーク）」でおなじみ、日本唯一の総合的デザイン振興機関

（社）日本グラフィックデザイナー協会（JAGDA）

九州大学・芸術工学東京サイト

芸術工学、デザインの分野で日本有数の教育研究実績を誇る九州大学大学院芸術工学研究院の首都圏拠点

インターナショナル・デザイン・リエゾンセンター

海外デザイン関連研究教育機関の参加により、国際的なデザイン人材の育成をサポート（運営：JIDPO）

参加海外研究教育機関

デルフト工科大学（オランダ）
ヘルシンキ デザイン芸術大学（フィンランド）
イリノイ工科大学（アメリカ）
プラットインスティテュート（アメリカ）
清華大学美術学院（中国）
ツォルフェライン スクール オブ マネジメント アンド デザイン（ドイツ）

東京ミッドタウン・デザインハブ

［営業時間］ 平日11:00－18:00　土日祝休
※イベント開催時の営業時間についてはお問い合わせ下さい。

今後の予定 ※詳細は www.designhub.jp をご覧下さい。

3/30～5/6　JIDPO
「Good Design Good Life ―日本のデザイン」

5/14～6/10 JAGDA
「日本のグラフィックデザイン：ジャグダ 1981-2006」

6/13～7/16 JIDPO
「China Design」

「日本のグラフィックデザイン：ジャグダ 1981～2006」

会期／2007年5月14日（月）～6月17日（日） 11:00～18:00
会場／東京ミッドタウン・デザインハブ

JAGDA展覧会委員長　廣村正彰

JAGDAが東京ミッドタウンに移転をして、新しくなった事務局は、ショッピングや美術館見学のついでに気軽に立ち寄れる場所になりました。今まで事務局を訪れる理由のなかった会員の方々にとっても、この展覧会を見に来ることをきっかけにJAGDAを訪れる機会が増えればよいですね。会員に限らず、デザインハブは広く社会に向けてJAGDAの存在意義を発信していかなければならない場所。その第一弾の企画として、JAGDAのこれまでの四半世紀に及ぶ歴史を振り返り、年鑑や自主制作ポスター展といった代表的な活動の中から、エポックメーキングとなった約1,000点の作品を選び出して展示しようと計画しています。

展覧会は2部構成で、1つは1981年から26年間続いてきた年鑑の掲載作品から、各年の優秀な作品をピックアップし、ポスターやパッケージといった6つのジャンルごとにわけて紹介します。作品は膨大な数になるので、本当は実物を展示したかったのですが、限られたスペースの中でできるだけたくさんの仕事を見ていただくため、映像という手段をとることになりました。
年鑑はその名の通り単年度の作品集ですが、今回はジャンルごとに分類し、時間の流れにおけるクリエイティブな変遷を見てもらえるよう構成しているので、きっと新しい発見があります。グラフィックデザイナーの果たす役割が時代によって変わりつつあることや、作品をカテゴリーにわけることで、カテゴリー自体の内容の変化も感じられると思います。
もう1つは、1983年以降継続して実施してきた様々なテーマのメッセージポスター展のオリジナル作品を、平和や日本といったテーマごとにわけて展示します。様々なメディアが発達し、ポスターの時代ではないと言われがちな現在ですが、この展示を見ることであらためてポスターの持つ魅力や、表現の力強さを感じていただけると思います。
こうした長年に渡る仕事を集積した年鑑や、JAGDAオリジナルの展覧会といった活動は、世界に類を見ないJAGDAとしての大きな成果です。これだけの内容が一堂に展示されることは極めて貴重な機会となるでしょう。

偶然にも今年事務局が移転し、デザインハブに参画することでこうした展覧会を企画する機会を持ちましたが、同時に、日本のグラフィックデザイン全体も近年、大きな転換期をむかえている気がします。
特に領域の拡張性といったものは非常に顕著で、個々の皆さんは日々そのことを強く感じているのではないでしょうか。
デザイナーは常に先を見て進んで行かなければならない仕事だと思うのですが、過去を知ることで未来のステップが見えてくる。それぞれの人のスキルをふまえることで今後の可能性に生かすことができます。
このタイミングで過去の歴史を振り返ることが、これから我々がグラフィックデザイナーとして活動をしていくうえでの、ひとつの道標になればよいと思います。

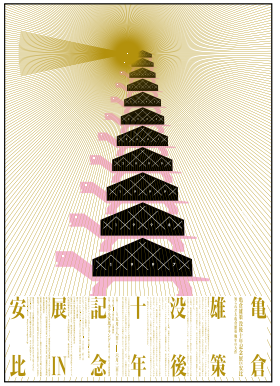
デザインフォ
Design Information

亀倉雄策の手によるランドスケープ 安比高原スキー場で10周忌の記念展

亀倉氏と谷口吉生氏の共同設計によるホテル安比グランド

安比高原リゾートのシンボル・ロゴタイプ（D:亀倉雄策）

JAGDA初代会長・亀倉雄策氏の10周忌を迎えるこの5月、氏が手がけた最大規模のデザイン・岩手の安比高原リゾートを会場に記念展が開催される。同リゾートは、スキーの腕前も一流であった氏が、スキー場のコース設計からエリア内の建築物、インテリア、サイン計画、店舗のロゴタイプまで全て手がけたもので、グラフィックデザイナーが関与した建造物としては最大規模といえる。ホテル館内には代表作も展示され、レセプションに合わせた特別ツアーも開催（5月19日～20日）。この機会に亀倉氏のデザイン思想をランドスケープで体感してみては？



展覧会告知ポスター（D:佐藤晃一）

亀倉雄策没後10年記念展 in 安比

会期：5月18日（金）～6月3日（日）　※レセプション：5月19日（土）午後7時より
会場：ホテル安比グランドおよび周辺施設（岩手・安比高原）
主催：亀倉雄策没後10年記念展実行委員会（JAGDA後援）
TEL. 03-3575-7074（事務局：リクルート）　www.recruit.co.jp/GG/

国立新美術館でイラストレーションの大規模展
TOKYO illustration 2007

東京イラストレーターズ・ソサエティによる大規模なイラストレーション展が、初夏の国立新美術館で開催される。会員作品に加え、一般公募による入賞・入選作品、往年の名イラストレーターによる作品、小学生によるワークショップ作品も展示。1000平方メートルもの空間で展開する。

TOKYO ILLUSTRATION 2007

会期：6月27日（水）～7月9日（月）
会場：国立新美術館（東京・六本木）
TEL. 03-5777-8600（ハローダイヤル）　www.nact.jp

東京ミッドタウンに、写真ギャラリーを中心とした富士フイルム初の複合型ショールーム「FUJIFILM SQUARE」がオープン（左　イメージ）。ギャラリーに加えアンティークカメラの展示やカフェなどもあり、幅広い年代層が「写真」の過去・現在・未来を楽しむことができる。また、富士ゼロックスの版画コレクションを展示・公開する「Fuji Xerox Art Space」も同時にオープンする（下　イメージ）。

写真文化の新たな情報発信拠点 東京ミッドタウンに誕生

FUJIFILM SQUARE「Professional Photographer 200人展」

会期：パート1／3月30日（金）～4月26日（木）
　　パート2／4月27日（金）～5月31日（木）
会場：東京ミッドタウン「ミッドタウン・ウェスト」1～2F
TEL. 03-6271-3350　fujifilmsquare.jp

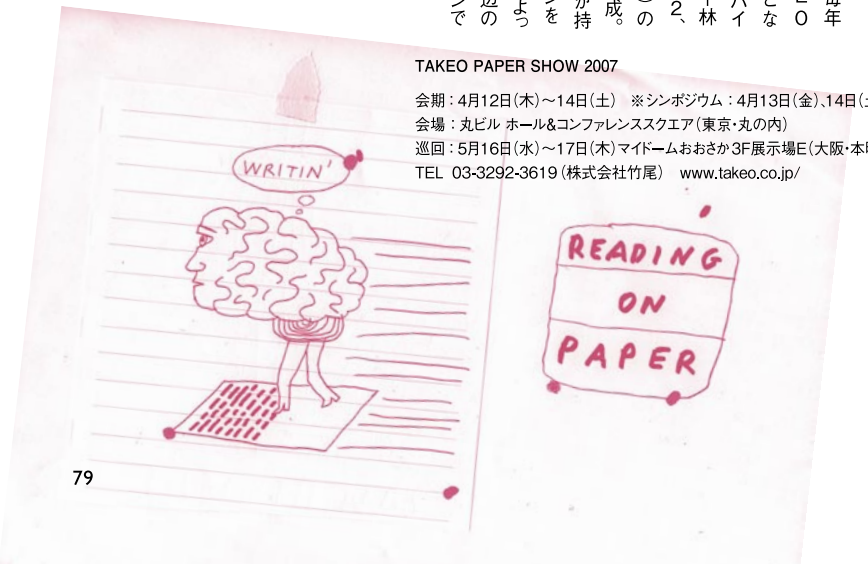
Fuji Xerox Art Space「リニューアル・オープン記念展」

会期：3月30日（金）～5月13日（日）
会場：東京ミッドタウン「ガレリア」内
TEL. 03-6271-5260
www.fujizerox.co.jp/event/hanga/index.html

今年のペーパーショウのテーマは〝FINE PAPERS〟

紙の商社・竹尾が1965年より毎年開催する紙の展示会「TAKEO PAPER SHOW」。42回目となる今年は会場をこれまでの青山スパイラルから丸の内へ移し、古平正義、平林奈緒美、水野学（それぞれ2002、01、03年度JAGDA新人賞）の3名のアートディレクターが企画・構成。A～Z、26種の〝ファインペーパー〟が持つ個性・機能性を生かしたデザインを国内外のクリエイター26名の作品によって表現し、会場となる丸ビルや周辺のショップ・カフェとのコラボレーションで数量限定のアイテムを制作する。

参加アーティストの1人、Paul Davisの作品



TAKEO PAPER SHOW 2007

会期：4月12日（木）～14日（土）　※シンポジウム：4月13日（金）、14日（土）
会場：丸ビル ホール&コンファレンススクエア（東京・丸の内）
巡回：5月16日（水）～17日（木）マイドームおおさか3F展示場E（大阪・本町橋）
TEL 03-3292-3619（株式会社竹尾）　www.takeo.co.jp/

acknowledgments

グラフィックデザインは、多くの企業や人々とのさまざまなコラボレーションによって生まれています。

株式会社 ジーイー企画センター
ヤマハ株式会社
株式会社 中島商店
株式会社 タマヤ
横浜ゴム株式会社「アドバン」
株式会社 リクルート「HUMAN-AD」
ddd ギャラリー
学校法人 穴吹デザインカレッジ
株式会社 オリコム

hhstyle.com
株式会社 クリエイティブマインド
タナカ デザイン ロジスティクス
横浜ゴム株式会社「PRGR」
敷島製パン株式会社
株式会社 東北新社
株式会社 松屋
トリ・バイントレーディング株式会社
株式会社 淡交社

フォートン株式会社
サッポロビール株式会社
株式会社 エヌ・ティ・ティ・ドコモ
ウツボムーン
東京造形大学
王子特殊紙株式会社
アグリックス株式会社
中沢フーズ株式会社
共同印刷株式会社

近藤康夫デザイン事務所
株式会社シップス
日経 BP 社 日経デザイン
千鳥屋
凸版印刷株式会社
株式会社 エムアンドエー
株式会社 誠文堂新光社 アイデア
株式会社 サン・アド
有限会社 バウ広告事務所

株式会社 アクシス
サントリーミュージアム [天保山]
株式会社 中川ケミカル
毎日新聞社
アルジョウィギンス株式会社
国際デザイン・ビューティカレッジ
株式会社 第一紙行
明治製菓株式会社
株式会社 村田金箔

集英社文庫
ファーバーカステル
大日本印刷株式会社
専門学校 桑沢デザイン研究所
株式会社 グリーンシード
株式会社 アイアンドエス・ビービーディオー
日本写真印刷株式会社
現代グラフィックアートセンター
洋書 ハックネット

本田技研工業株式会社
サントリー美術館
図書印刷株式会社
ミズノ株式会社
株式会社 たき工房
ヤマギワ株式会社
ロボットミュージアム in 名古屋
株式会社 スチル
富士ソフト株式会社

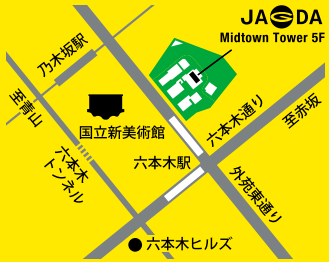
株式会社 イッセイミヤケ
株式会社 リクルート
株式会社 ミキモト
東京電力株式会社
ギャラリー・間
ギンザ・グラフィック・ギャラリー
学校法人塚本学院 大阪芸術大学
東京ガス株式会社

明治乳業株式会社
株式会社 竹尾
東陶機器株式会社
平和紙業株式会社
東北芸術工科大学
株式会社 良品計画
株式会社 グラドッグ
YOICHI NAGASAWA

株式会社 モリサワ
21_21 DESIGN SIGHT
クリエイションギャラリー G8
サントリー株式会社
株式会社 資生堂
株式会社 コーセー
学校法人 女子美術大学
日本デザイン専門学校

JAGDA

この度の移転を機に、JAGDAのシンボルマーク(「G」マーク)とロゴマークが生まれ変わりました。JAGDAが設立して間もない1979年、会員からの公募によってシンボルマークを決定。以来およそ30年が経過したのを受け、今の時代にあわせたリニューアルを行うことになりました。新たな拠点で活動を始めるJAGDAにふさわしい、新しいマークの誕生です。



社団法人日本グラフィックデザイナー協会

〒107−6205　東京都港区赤坂9-7-1 ミッドタウン・タワー5F
TEL. 03-5770-7509　FAX. 03-3479-7509
www.jagda.org　jagda@jagda.org
[営業時間] 10時−17時

都営地下鉄大江戸線「六本木駅」8番出口より直結
東京メトロ日比谷線「六本木駅」地下通路にて直結
東京メトロ千代田線「乃木坂駅」3番出口より徒歩約3分
東京メトロ南北線「六本木一丁目駅」1番出口より徒歩約10分

JAGDAでは、会員およびフレンドメンバーを随時募集しています。 詳細は、JAGDAウェブサイトをご覧下さい。

会員	[正会員] グラフィックデザインまたはその教育に関し2年以上実務に従事している方や、その他、同等の資格を有する方 [賛助会員] グラフィックデザインに関心を有する法人、団体および個人の方
フレンドメンバー	[スチューデントメンバー] 学生の方が対象 (期限:学生の間) [サークルメンバー] グラフィックデザイナーの方 (期限:最長2年間/2年在籍の上、2年以内に正会員になる場合、入会金が免除) [サポートメンバー] グラフィックデザインに理解や関心のある方 (期限なし)

アンケートのお願い

JAGDA広報委員会では、今号の会報制作にあたり大幅なリニューアルを敢行しました。従来のA4判からハンディなA5判へのサイズ縮小、そして会報「JAGDA REPORT」には協会の事業報告を集約し、新しく特集を中心とした「ジャグダ」が誕生。今号の内容について、JAGDAウェブサイトより、ぜひご感想をお寄せ下さい。

www.jagda.org

企画・構成・編集・制作 —— JAGDA広報委員会

長友啓典[広報担当運営委員] —— 監修
秋田　寛[委員長] ———— 編集長
永井裕明[副委員長] ———— 副編集長

阿部真理子	プラリちょこっとミッドタウン
居山浩二	入居可能なデザイン事務所向け物件情報
工藤"ワビ"良平	ROPPONGI FREEDOM
小島利之	六本木デザイン・サーキット
清水柾行	ステカンのある六本木
新村則人	ありがとう神宮前、こんにちは六本木
戸田宏一郎	ROPPONGI NO KATACHI / ありがとう神宮前、こんにちは六本木
永井裕明	表紙 / 六本木、空欄空景
松吉太郎	六本木裏 アン事情

編集協力/高橋律夫・杉山衛(株式会社アルシーヴ社)
撮影協力/木奥惠三(木奥惠三写真事務所)

※表紙には、亀倉雄策氏(JAGDA初代会長)のリトグラフ「Fresh Impressions」(1994)を使用させていただきました。

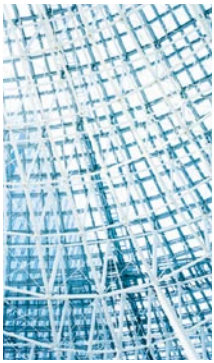
JAGDA REPORT vol.180　特別号「ジャグダ」

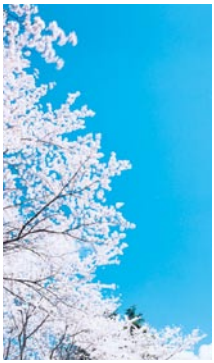
発行/2007年3月30日　印刷・製本/株式会社北斗社　用紙/[表紙]ミルトGAスノーホワイト 菊判 125kg　[本文]スマッシュ 菊判 53.5kg
発行者/社団法人日本グラフィックデザイナー協会
〒107-6205 東京都港区赤坂9-7-1 ミッドタウン・タワー5F　TEL 03-5770-7509　FAX 03-3479-7509　www.jagda.org　jagda@jagda.org

©2007 by Japan Graphic Designers Association Inc.　※本書を無断で複製・転載することを禁じます。

学校法人 専門学校 日本デザイナー学院
株式会社 大広
特種製紙株式会社
ガーディアン・ガーデン
株式会社 岡村製作所
ビエ株式会社
武蔵野美術大学
名古屋芸術大学
北海道芸術デザイン専門学校
株式会社 博報堂
株式会社 美術出版社
大日本インキ化学工業株式会社
総合学園ヒューマンアカデミー
望月印刷株式会社
株式会社 クリーク・アンド・リバー社
株式会社 フリーフライト
創造社デザイン専門学校
国際アート＆デザイン専門学校
株式会社 データクラフト
アドビ システムズ株式会社
佐川急便株式会社
ムーサ株式会社
セイコーエプソン株式会社
五條製紙株式会社
新生紙パルプ商事株式会社
株式会社 損害保険ジャパン
穴吹デザイン専門学校
株式会社 ユニクロ
ハグルマ封筒株式会社
株式会社 六耀社
ハイデルベルグ・ジャパン株式会社
株式会社 リビングデザインセンター OZONE
熊本デザイン専門学校
日本工学院専門学校
株式会社 ヤマト
株式会社エキスパートスタッフ　クリエータースタジオ
朝日新聞社
株式会社 ライトパブリシティ
株式会社精美堂
株式会社 日本デザインセンター
宝酒造株式会社
株式会社 ユポ・コーポレーション
専門学校 東洋美術学校
東北電子専門学校
成旺印刷株式会社

Blossom!
Tokyo Midtown
2007.3.30





Tokyo Midtown